築垣壹廻　四面貳町　長參百貳丈壹尺

同前日記云、无實者

今檢同前、

萱葺僧房壹宇　長拾伍丈　廣貳丈　高染尺

同前日記云、无實者、

今檢同前

萱葺僧房壹宇　長拾伍丈　廣貳丈　高染尺

同前日記云、无實者、

今檢同前、

南大門條宇　長伍丈捌尺　廣壹丈伍尺　高壹丈參尺

西大門壹宇

東大門壹宇

大衆院

假屋壹宇



同前日記云、件雜舍无實者、

今檢同前

昊樂壹具

袂肆面　勒脚貳拾陸條

（以下缺失）

（繼目）

而して、前掲の如く築垣は四面二町にして長さ三百二丈一尺ありとすれば、現に指定された地域の廣さと大體一致するものがある。然りとせば、南大門は現在南門阯に擬すべき礎石の殘れる場所に存するが自然の位置であり、東大門も礎石の發見に依り契合するものゝ如く、西大門の存在も此記錄に依つて明かであり、史蹟と文献と相俟つて啓發される所が多い。

尙ほ、吾妻鏡には治承四年十月の條に、平氏方に屬する足利太郎俊綱が、此地方に在住する源氏方を攻めむが爲上野府中の民家を燒けることが見えるので、其際國分寺も燒失せしと說くものがある。然れども、之は推定に止まるもので、直に然りと斷ずることは出來難い。又、現に大字東國分の北端には良心院と稱する天台宗

の一寺を存し、俗に國分寺と呼ばれてゐるが、寺傳には慶安四年の創立とあり、山號を國分山と稱する以外には、何等資料となすべきものもない。

本遺蹟は大正十五年十月內務大臣から史蹟として指定され、昭和二年十一月には其管理者として國府村と元總社村とが指定せらるゝに至つた。

**指定の事由**

內務大臣の指定した事由は保存要目史蹟の部第二に依るもので、卽ち、社寺の阯跡及祭祀信仰に關する史蹟にして重要なるもの」の內の「社寺の阯跡にして重要なるものに該當するのである。

**保存の要件**

公益上必要止むを得ざる場合の外は現狀の變更を許可せざることゝなり、遺瓦の採取も禁ぜられてゐる。

# 一五　山王塔阯

**名稱**

山王塔阯

本史蹟は古くから斯かる名を以て知られて居たものではない。大正の初め、計らずも此地域に於て、後に述ぶる塔の中心礎石を發見したが間もなく埋められた。而して、大正十年八月、再び之を發掘して、寺院の阯たることを知つたが、別に口碑傳說も存してゐないので、地名に依つて、附近一帶を「山王廢寺阯」と呼ぶに至つた。後、昭和三年一月、內務大臣より史蹟として指定せらるゝに際しては、寺院阯と認めらるゝ全地域に及ぼさず、塔の遺阯たる此礎石を中心とする現區域のみを指定することゝなつたので、名稱も之に相應しく「山王塔阯」と謂はるゝに至つたのである。

**所在地**

群馬郡總社町大字總社字山王

群馬總社驛より南方へ十五六町、總社町大字總社に屬する字山王の部落內にし

て、人家の立ち並べる間に在れど、國府村方面へ通ずる道路の北に沿ひ、其地點に日枝神社が祀られ、巨松の亭立するものがあるから、直に知ることが出來る。

**地籍**

民有二筆六十五坪で、その内譯は左の通である。

群馬郡總社町大字總社字昌樂寺廻村北二、四〇八番　宅地三十八坪　都丸柳造外四十五人

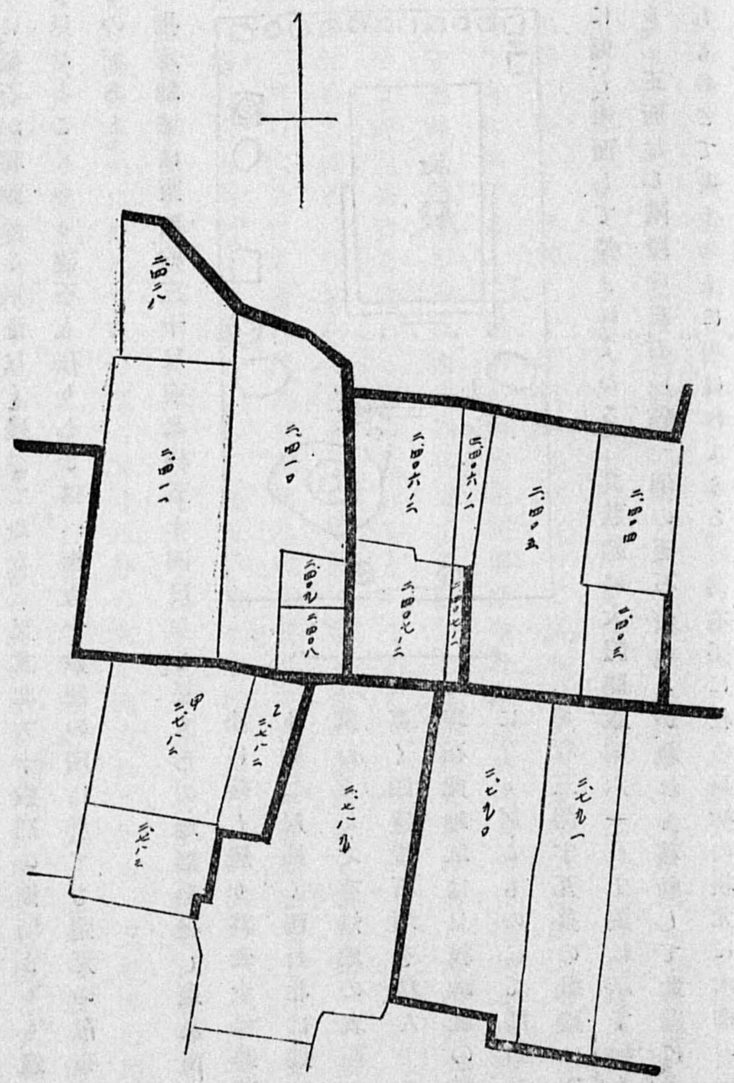
同　二、四〇九番　宅地二十七坪　同

**現狀**

本史蹟の占むる地點は上毛の沃野の北端に近く、利根の本流を西へ距る約十五六町、西南十町餘には國分寺阯を存し、南方約十四町には當國の總社を控えたる形勝の位置である。現在は、四周に民家建ち並べるを以て、其建物や樹木等に視野を遮ぎられてゐるが、然らずんば眺望頗る佳なるべきである。

現在は指定地域外になつてゐるが、西北約一町、都丸林次郎氏の宅地となれる附近には布目瓦を散布し、礎石もありしもので、現に其家屋の床下には地下一尺許の





山王塔阯並附近地籍圖

所に、礎石が移動せる形迹なく殘つてゐる。又其北方十數間の箇所よりも、遺瓦を發見せることあり、礎石も在りしと傳へ、南方十數間の所に於ても遺瓦の散布せるものがある。

指定地域は東西約三十尺、南北約五十四尺なる長方形の地形を呈し、東及南は道路に接し居り、其表土は路面より約二尺高く、西及北は畑地に隣れるが、之亦畑地の表面より高く、四邊皆石垣を積んでである。

現在、此地域は日枝神社の境内になり居るものにて、間口二間、奥行三間半、瓦葺の社殿は稍西北に偏し、南面して營まれてゐる。其狀態は大體圖版第六一及上圖に示す如くである。正面なる階段の左右に各一個の礎石があるが、孰れも移動して此處に置かれしものとて、表土の上に現はれてゐる。其右手に松の巨樹の根元に木柵の繞らされし穴の中に一大礎石が露はれてゐる。別に松樹の東方約六尺卽ち社殿の東南の隅より東南約八尺の箇所及同樹の西方約十尺卽ち社殿の西南隅より西南約四尺の箇所には移動されし礎石が表土の上に現はれて存してゐる。又、社殿の東側より北側に掛けては碑石や末社が並び立つて居るが、其内東側の「淡島大明神」と刻せる碑や東北隅にある「三國第一山木花開耶姫命、身祿靈神内八海守護神小御嶽山外八海守護神」と刻せる碑及西北隅に立てられてある「奉納大乘妙典日本廻國成就處」と刻せる碑の臺石も礎石と認められるものである。

松の根元の大礎石は、現境内の地表下二尺許に當り、南の道路面と略々同一平面上にある。其の大さは東西八尺九寸、南北八尺二寸、厚さは先年發掘調査したるに五尺餘に達し居り、周圍に根締めとして、玉石が詰められて居る。(圖版第六五參照)礎石の上部は平面に削られ、中央に徑二尺一寸五分深さ五寸七分の柱受が掘窪められ、更に其の中央に徑八寸五分、深さ九寸八分の穴が造られて居る。又、柱受の周圍には三尺六寸の徑を有する幅二寸、深さ一寸の環狀溝があり、更に之から放射的に同樣の溝が四方に穿たれてゐる。此の四條の溝は正しく東、西、南、北を指してゐ

る。(圖版第六二及第六五參照)此等の構造の上より見れば、明かに塔の心礎で、中央の穴は建築當初に佛舍利などを納めしものなるべく、周圍の溝は水氣を他に導いて腐朽を防がんとしたものと解せられる。

境内入口の左にある礎石は徑三尺に三尺五寸、右にあるは徑三尺二寸に三尺五寸にして、各々一級段の圓き造出を有し、其徑孰れも二尺二寸あり、更に其中央には、前者に於て徑六寸、後者に於て徑五寸の圓孔を有して居る。(圖版第六六參照)此の二礎石は境内の東北隅なる三國第一木花開耶姫命云々と刻せる碑の臺石と共に、前述せる都丸氏宅地附近にありしを此處に移せるものであると謂ふ。又、社殿の東側なる淡島大明神の碑の臺石となつてゐる礎石は、其徑三尺二寸に三尺五寸、表面は碑を立てた爲、明かでないが、圓き造出を有することは認められる。之の南に隣れる礎石卽ち、巨松の東方約六尺にあるものは最初、道を隔てゝ東に隣れる民家の垣の内側にあつたのを後年此處に移せるものである。尙、社殿の西南約四尺の地點にある礎石も亦現境内の附近にありしもので、孰れも圓形の造出を有せず、自然石の上面を平らかにした同樣式のものであるから、共に塔の中心礎石たる松樹下の大礎石に對して、側柱の礎石たりしものであらう。

之を要するに、本史蹟は神社を營み、又は道路を設ける爲に著しく原形を變じてゐるが、前記の大礎石を中心として、規模の宏壯なる塔が建てられてありしことは明かで、現境内は其土壇の一部を利用せるものと見做すを得べく、現に道路　隔てたる宅地又は畑の路面より高きは、現境内と共に塔の土壇たりしことを地形に於て物語るものである。又、前述の都丸氏の宅地附近に布目瓦を散布し、礎石の多數ありたりしことは、其處に此塔と關係ある建物ありしことを立證するもので、現在は當時の規模を徵するに困難な狀態になつてゐるが、塔よりの間隔及位置等より推定して金堂の趾なりと思はれる。從つて、其の北方十數間にして遺瓦を出すは、或は講堂の趾かとも考へられ、南方十數間の箇所に遺瓦を散布せるは中門趾にあらずやとも思はれる。卽ち、金堂が南面して營まれ居り、本塔趾は東塔たりしものであらう。

## 遺物

指定地域附近の畑地及都丸氏宅地附近の畑地には尙、布目瓦の破片の散布せる

を見受けることあるが、既に發見せるものには花瓦、唐草瓦及文字瓦あり、其文様及製作は上野國分寺阯發見のものと略ぼ同様のものあれど、中には、それより稍古き年代に屬すと思はるゝものを存してゐる。本史蹟より發見せられた瓦は相當の數量に達し、比較的に形の完きものも存せるが圖版第六四には其様式種類を示す程度に數點を擇んで置いた。

尚、寫眞に示せるものゝ他、篦書の文字瓦が發見されて居り、唐草瓦では四重弧形のものをも出してゐる。

## 由來傳說

口碑傳說等の存せるものがない。大正の初め、境内の掃除をなし、其除草を埋める穴を掘らんとして、偶然、大礎石を發見せしことありしが、間もなく之を埋めた。後、大正十年八月、現に本縣史蹟名勝天然紀念物調査會臨時委員たる福島武雄等は青年團の後援を得て、縣當局等立會の下に再び之を發掘したのである。

當時、國分寺阯は未だ史蹟として指定せられず、國分尼寺阯に就ては定說がなかつたので、本史蹟を以て國分尼寺に擬し、或は從來國分寺阯として傳へられたるものを尼寺に擬して、本遺蹟を國分寺阯と見るの說さへ生ずるに至つた。然れども、國分寺阯としては從來傳へられたる國府村所在の遺蹟が大正十五年十月に史蹟として內務大臣より指定せられし程のもので、議論の餘地がない。尚當時國分寺阯の調査に當れる內務省囑託柴田常惠氏に依つて、國分尼寺阯と認むべきものも、國分寺阯の東方約四町なる同村大字東國分字藥師道南の地に在りと考定さるゝに至つた。しかのみならず、本史蹟に於ける心礎の如き複雜なる製作のものは、國分寺創建の時よりは寧ろ古き年代に屬すと解せられ、且つ塔阯を有する國分尼寺阯は他の諸國に於ても其例乏しく、又、遺瓦も前述の如く、國分寺阯發見のものより古きものを存することゝて、本遺蹟を國分尼寺阯に擬するは適當ならずと思はれる。

國分寺創建に先立ち、諸國に於て寺の營まれしものあるは國史に見ゆる處である。即ち、持統天皇の朱鳥六年には全國に五百四十五寺ありしことが明かであり、同七年十月には仁王經を諸國に講ぜしめ、同八年五月には金光明經一百部を諸國に頒つたことが見えてゐる。又、文武天皇の大寶二年には諸國に國師を置き、聖武

天皇の神龜二年七月には諸國に詔して國家平安の爲金光明經又は最勝王經を轉せしめた。同五年十二月には國別に金光明經十卷を頒ち、同九年三月には國毎に釋迦像一軀夾侍二軀大般若經一部を造寫せしめしことがある。尚、十二年六月には毎國、法華經十部を寫し七重の塔を建てしめ、同年九月には勅して國別に觀音像一軀、觀音經十卷を造寫し藤原廣嗣の亂を祈らしめた事實もある。斯く、種々の事實あるに徵して、之等佛像を安置し、經文を所藏し、法會を行ひ、祈願の道場となすに足る宏壯なる建物の施設ありしことは明瞭であり、其位置の國府に近かりしことも想見に難くない。而して、之等の寺院中には、天平十三年の詔に依つて國分寺の造立せらるゝに及び、引直して之に充てられしものあるべきも、亦別に存續されしものありと思はれる。而も國分寺の建立と共に、中心が之に移り、他の寺院が次第に閑却され勝になりしことも自然の歸結として考へ得らるゝ處である。之等寺院が祝融の災に遭ひ、又は頽廢甚しきに及んでは、容易に再建復舊等の機運にも惠まれざりしなるべく、其建物を失ひてより久しき年月を經るに及んでは、嘗て此處に如何なる寺が存せしかさへ忘れられるに至りしものと思はれる。國府、國分寺又は國分尼寺の阯に近く、規模の相當宏壯なる寺院阯ありて、而も、其如何なる寺なりしやをさへ傳へざるが如きは、概ね、此種の寺院なるべく、石見、河内、紀伊、武藏、相模等にも其例あり、本遺蹟の如き當に其一と認められ、國分寺の前驅をなした官寺と解して差支なからう。

大正十五年十一月、本縣知事より此境内を史蹟「山王廢寺阯」として假指定されたが、昭和三年一月に至り、内務大臣から史蹟「山王塔阯」と指定された。尚ほ同年九月には總社町が其管理者として指定さるゝに至つた。

### 指定の事由

内務大臣の指定した事由は保存要目史蹟の部第二に依るもので、卽ち、「社寺の阯跡及祭祀信仰に關する史蹟にして重要なるもの」の内の「社寺の阯跡にして重要なるものに該當するのである。

### 保存の要件

公益上必要止むを得ざる場合の外、左の事項は許可せられないことになつてゐる。

(1)礎石の移動並毀損

(2)遺瓦等の採取

又、樹木の栽植や工作物の建設並改築に就ては許可に當り十分の注意を要することになつてゐる。



# 一六 妙義山

## 名稱

妙義山

妙義山と云ふは總稱で、委しくは白雲、金洞、金雞の三峰に分れて居る。東方より望めば、白雲山と金雞山の中間に金洞山が見えるから一に之を中之嶽とも呼んでゐる。

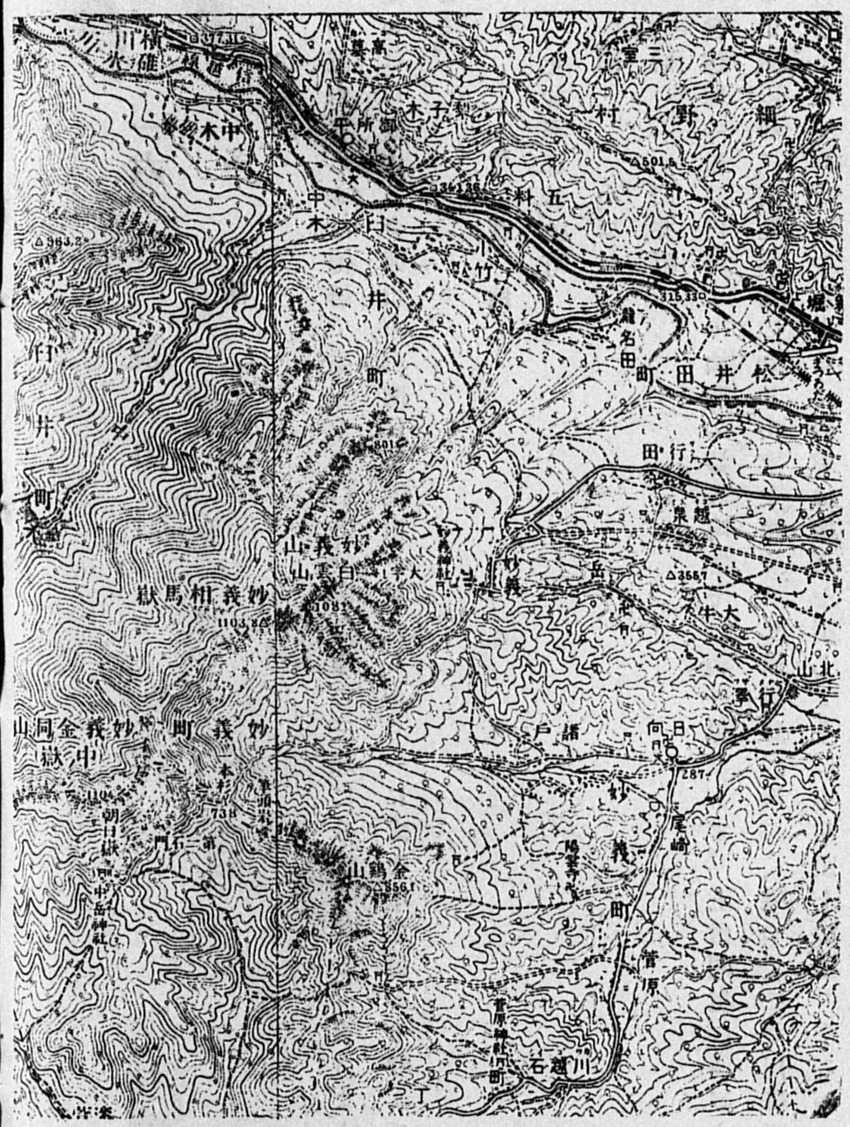
## 所在地

北甘樂郡妙義町

同　小坂村

同　臼井町

信越線の松井田驛より山腹の妙義町までは約一里である。上信國境に連亘する山脈の前に、突兀鋸齒の如き山容を峭立させ、信越線の汽車に乘つて、松井田驛附近より之を仰げば、中天を衝く岩嶂は觀者を壓して、今にも其頭上に墮ち來るかの




妙義山附近地形圖（陸地測量部五萬分一）



感がある。

## 地籍

指定區域の大部分は碓氷事業區の國有林に屬し、妙義神社境内、中之嶽神社境内又は民有地が其間に介在してゐる。台帳に依る總面積は二百八十七町三反一畝十九歩で、妙義山の中腹以上卽ち風景の勝れたる部分は悉く含まれることになる。其内譯は左の通である。

| 所在地 | 地番 | 地目 | 地積 | 所有者 |
|---|---|---|---|---|
| 北甘樂郡妙義町大字妙義字妙義山 | 三 | 神地 | 二八一、六一九歩 | 國 |
| 同　小坂村大字上小坂字中之嶽 | 一、二四八 | 神地 | 六、三一六 | 同 |
| 同 | 一、二五一ノ一 | 山林 | 四一、三一一 | 柴垣はる |
| 同 | 一、二五一ノ二 | 同 | 三、九一六 | 同 |
| 同 | 一、二五一ノ三 | 同 | 三、一〇三 | 同 |
| 同　妙義町大字諸戸字諸戸 | 九六四 | 國有林碓氷事業區第七十五ノ二林班 | 二一二八、一一四 | 國 |
| 同　臼井町大字五料字中木山 | 四、四六〇 | 國有林碓氷事業區第七十一林班ろ小班 | 四〇八、六〇〇 | 同 |

## 現狀

妙義山は荒船山及押高山等と共に嘗て或る火山の火口壁をなせしものが、其後の爆裂、削剝等の作用に依り山體切開して原形を失へる所謂切開火山と認むべきもので、主として此山體を形作る岩石は輝石富土岩に屬する熔岩及集塊溶岩である。此岩石は板狀若くは柱狀節理を呈する性質を有するを以て、風化作用は自由に之に働き、遂に白雲、金洞、金雞等の奇峰を爲すに至つたもので、之等に關しては理學士佐川榮次郎氏が「震災豫防調査會報告第十九號」に於て詳述せられ居り、其說は學界に於て大體之を認められて居る。然し、今は名勝としての妙義を記すのであるから此等の專門的な記述は避けることゝする。

白雲山は高さ三千六百四十尺、妙義町の西方に聳立し、山軸略南北に走り、金洞山は高さ三千六百四十三尺、其西南に連り、山軸略東西に伸び、金雞山は高さ二千八百二十五尺、金洞山より東南に走る一枝脈で、山軸は東々南より西々北に走つてゐる。(圖版第六七參照)各峰の頂は鋸齒狀の連續するものが略ぼ同一の水平を保つて形成されて居る。山軸の兩側に於ては百尺乃至三百尺を超ゆる絕壁と爲り、峰頭は極めて幅狹くなつてゐる。更に絕壁の下は傾斜稍緩にして種々の方向に走れる小絕壁面及數多の板狀岩及柱狀岩があり、岩態多種多樣、所謂妙義の奇岩石門等は此部に現出されてゐる。此奇岩の部分より上方は樹木甚だ尠く山骨稜々として ゐるが、下方は傾斜益々緩となり、岩屑及土壤に蔽はれるを以て、樹木繁茂し、秋期紅葉の美を呈する素因となつてゐる。

白雲山の東腹には倭建命を祀れる妙義神社があり、社記に欽明天皇の朝の創立寶龜年中の再興と傳へ、江戸時代には上野東叡山宮親しく祭事を行はれ、幕府よりも年々奉賽ありし程にて、今に社宇宏麗、亭立する老杉と相俟つて神寂びてゐる。其裏手の高所には俗に大の字と呼ばるゝ竹を束ねて大の字形に造りて建て幣束を結びつけしものがある。妙義大權現の大の字に因めるもので、一種の名物として知られて居る。多數の幣束が結びつけられて居るから遠くよりも之を望むことが出來る。此大の字より奥の院を經て山頂に至り、別路大の字に戻る途中には、上り鳩胸、四這、大矢筈、屏風岩、逆下り、大戻し、鶯の瀧、日暮の瀧、獅子岩、船岩等の奇勝があつて目を駭かすに足るが、急峻にして、案内者あるにあらざれば登攀危險である。尙、其裏山巡りは未だ廣く一般に知られないが、奇岩石門等聳峙起伏し、妙義全山の

奇景の粋を鍾めしものと謳はる金洞の風致にも比すべきものがある。

金洞山は妙義の町よりは山路約一里、岩石の奇は茲に到つて極まると云ふべきである。高さ九十尺に餘る第一石門は其の東の山峽に立ち、之を通過して右進し鐵鎖を利用して第二石門を拔ければ第三、第四の石門相次で現はれ、蠟燭岩、龜石、天狗岩、ゆるぎ岩、大砲岩、御鏡岩、蟻の戸渡、胎内潜り等の奇岩怪石は、其前面並に左右に或は空を衝いて峭立し、或は山上より落ち懸らむとし、神斧鬼工、眞に神祕の境を彷彿する觀がある。（圖版第六八第六九及第七〇參照）之より一旦踵を廻らして第一石門に歸り、其西に進むこと五六町すれば、卽ち西の山峽で朝日嶽と呼ぶ直立二百八十尺の巨巖の下に中之嶽神社がある。此朝日嶽にも鐵鎖につながつて纜に攀登する鬚摺岩や鐵梯子の嶮がある。頂上の轟岩は響に轟大尉が此處に倒立を試みたので、遂に其名を附するに至つた。此頂に立つて眺むれば西大國岩、二見岩、鳥帽子岩、鞍掛岩、九曲岩等の奇岩を指顧することが出來る。尙ほ、石門の大さを示せば左の通である。

第一石門　穴の高さ九十尺　幅二十五尺

第二石門　穴の高さ四十尺　幅十五尺

第三石門　穴の高さ八十二尺　幅十一尺

第四石門　穴の高さ八十尺　幅九十三尺

金洞山の入口なる一本杉の茶屋より左すれば、（妙義町を脊にし）金雞山を探るに便である。此山も筆頭岩、子持岩、挾岩、劒ケ峯、氷室ケ岳、帆立岩等の奇岩、奇勝に富むが、就中、筆頭岩には馬脊渡、親不知八間上り等の嶮があり、登攀者をして戰慄せしむるものがある。然れども、岩頭は眼界廣濶、關東平野を一眸に收めることが出來て、此冒險に報ゆるに充分である。

妙義山は奇景を以て海内に冠たるものがあるが、其巉巖を點綴する霜葉の美も亦他に匹儔なく、加ふるに展望の絶佳なるものあつて、景趣愈々多く、古來登攀を試みし文人雅客の諷咏や畫圖の佳品も尠からず、上信日記、木曾路名勝圖會等に特筆大書せらるゝを始めとして諸書に見えてゐる。赤城、榛名と共に上毛三山と呼ばれるのみならず、耶馬溪、寒霞溪と共に日本三奇勝の一に數えられるのも宜なりと謂ふべきである。故に大正十二年三月に至り、內務大臣より名勝として指定され、同月國有林に就ては農林省が之を管理することゝなり、國有林以外の土地に就ては、大正十四年十一月、群馬縣が管理者として指定された。

**指定の事由**

内務大臣の指定した事由は保存要目名勝の部第四に依るもので、卽ち「著名なる奇岩の項に該當するのである。

**保存の要件**

公益上必要止むを得ざる場合の外、風致を損傷すべき現狀變更を許可することの出來ないのは勿論、岩石の採取、樹木の伐採、家屋の建築及道路の新設修築に就ては十分の注意を要することになつてゐる。

欠

（第一　爐）

（第二　爐）

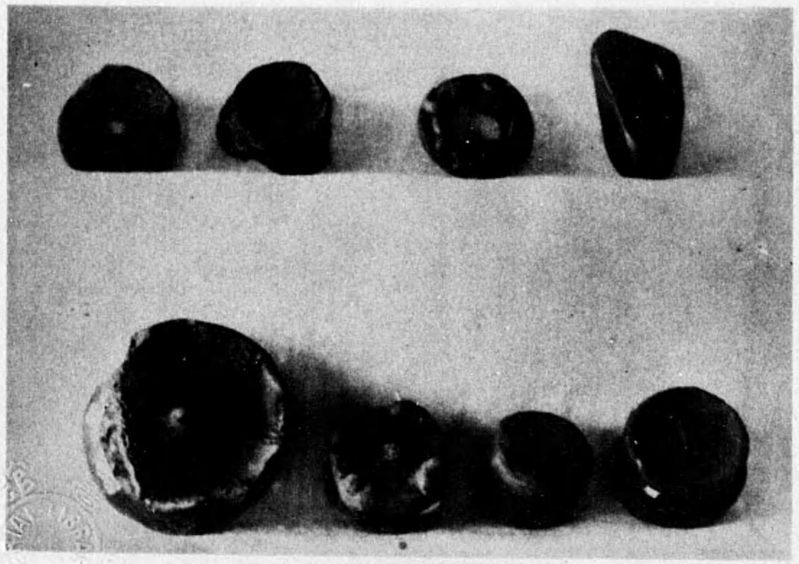
圖版第二　瀧澤石器時代遺蹟

欠

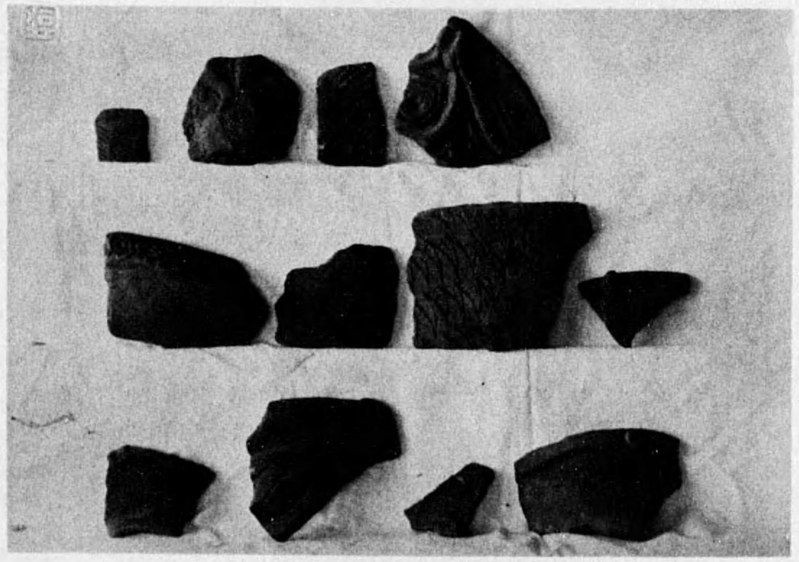
（第三爐）

（石棒等發見地點）

圖版第三　瀧澤石器時代遺蹟

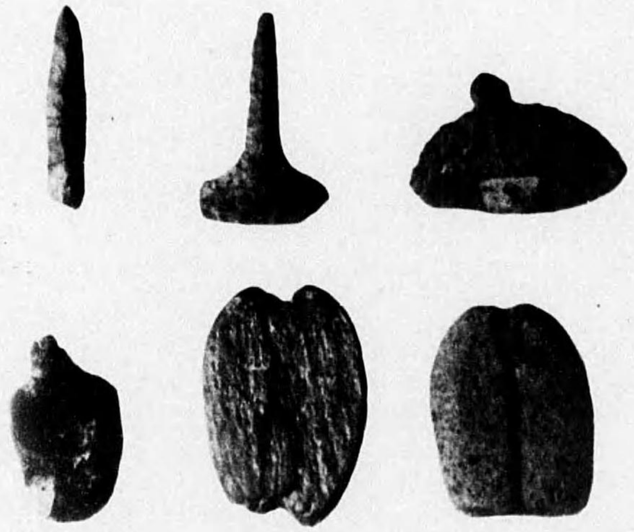


（裝　身　具）

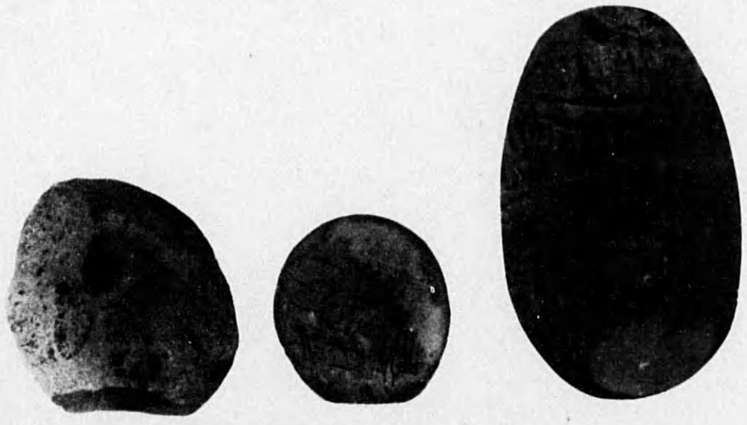


（土　器　片）

圖版第四　瀧澤石器時代遺蹟發見品



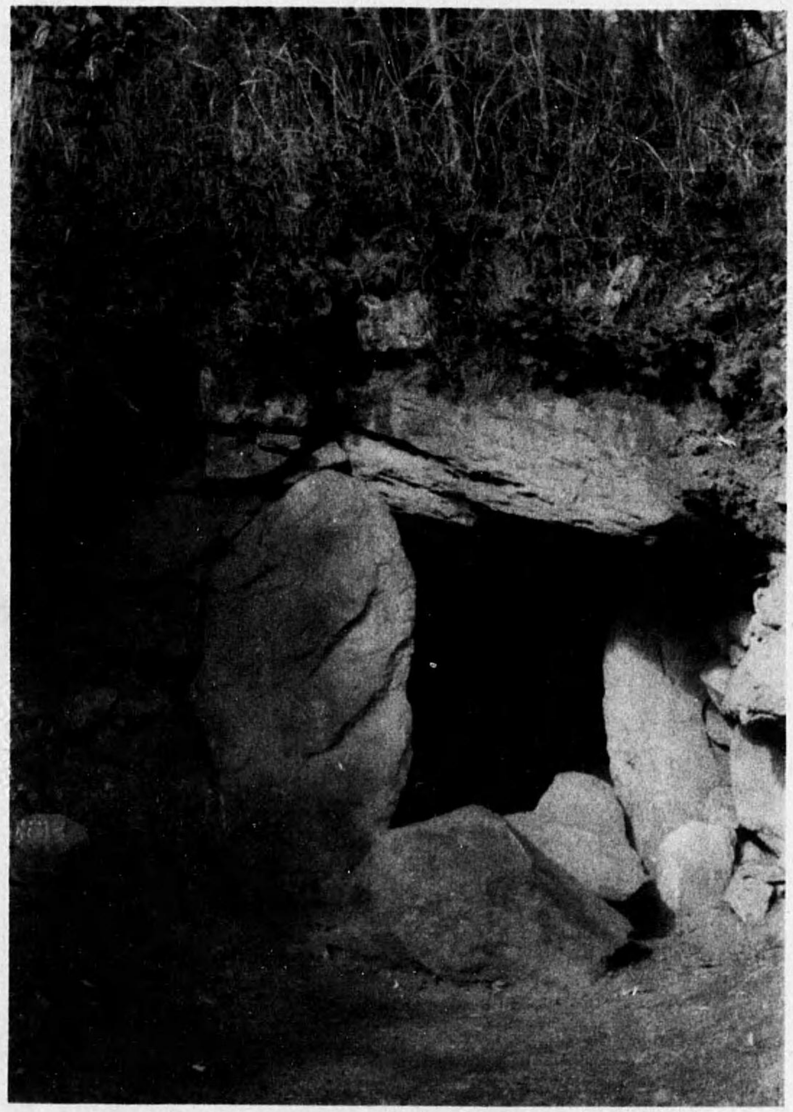
（石　製　品）



（版　　岩）

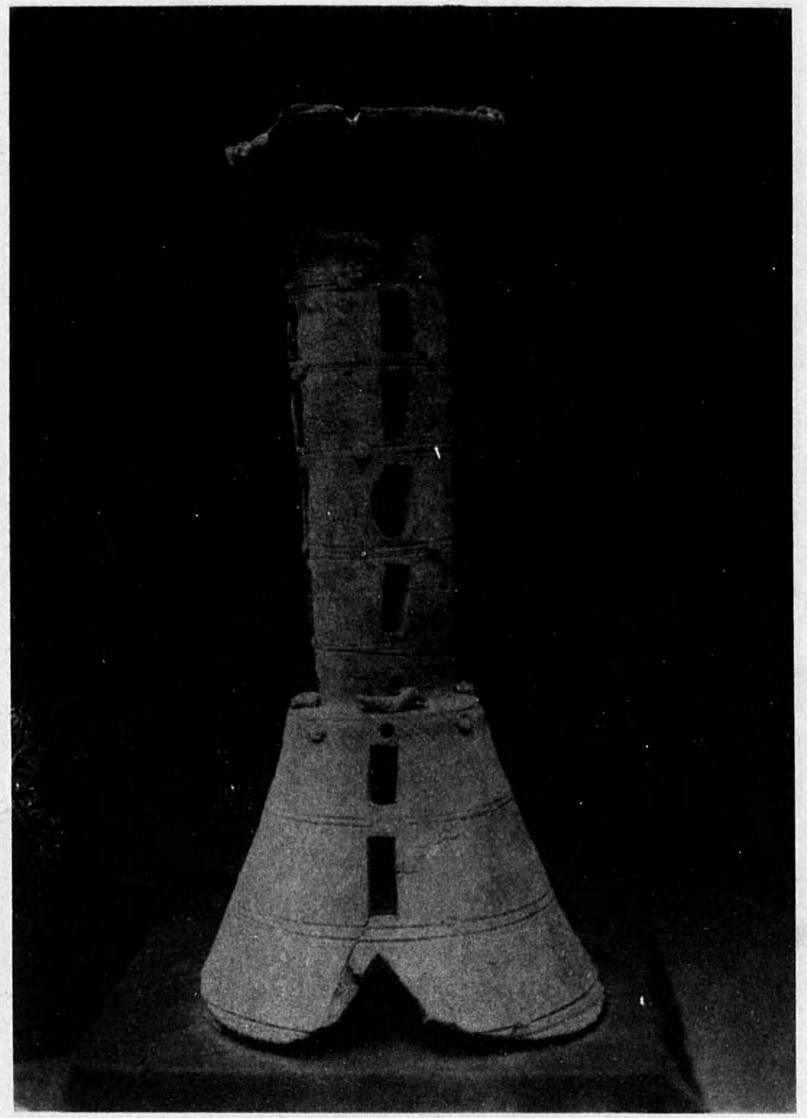
圖版第五　瀧澤石器時代遺蹟石製石

圖版第六　前二子古墳全景



圖版第七　前二子古墳石槨入口

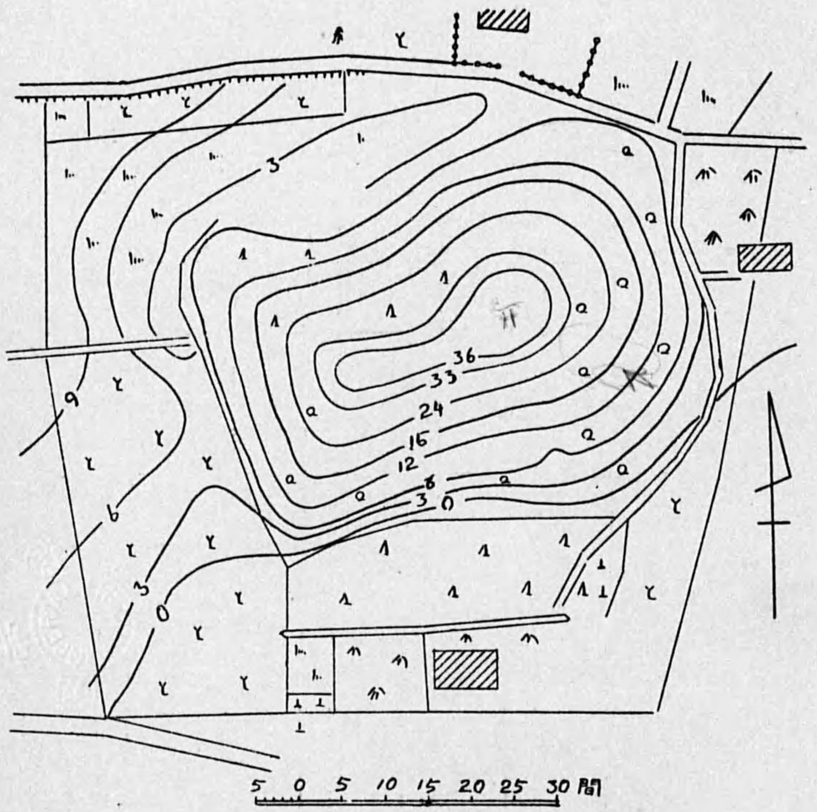
欠



圖版第九　四神齋瓮（前二子古墳出土）

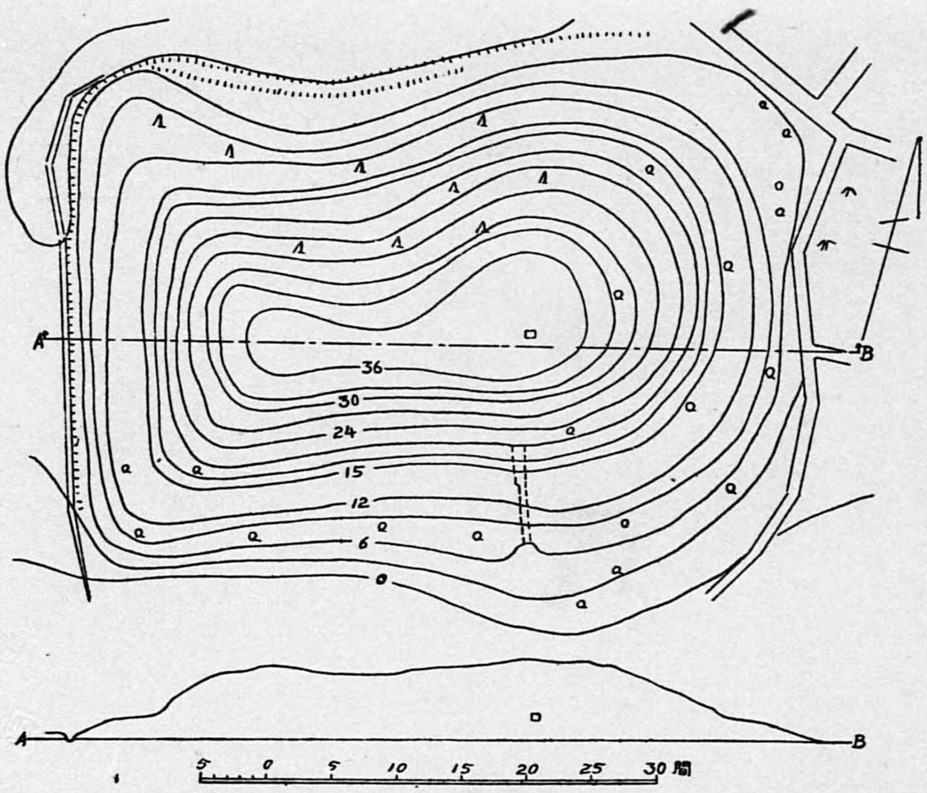
欠

欠



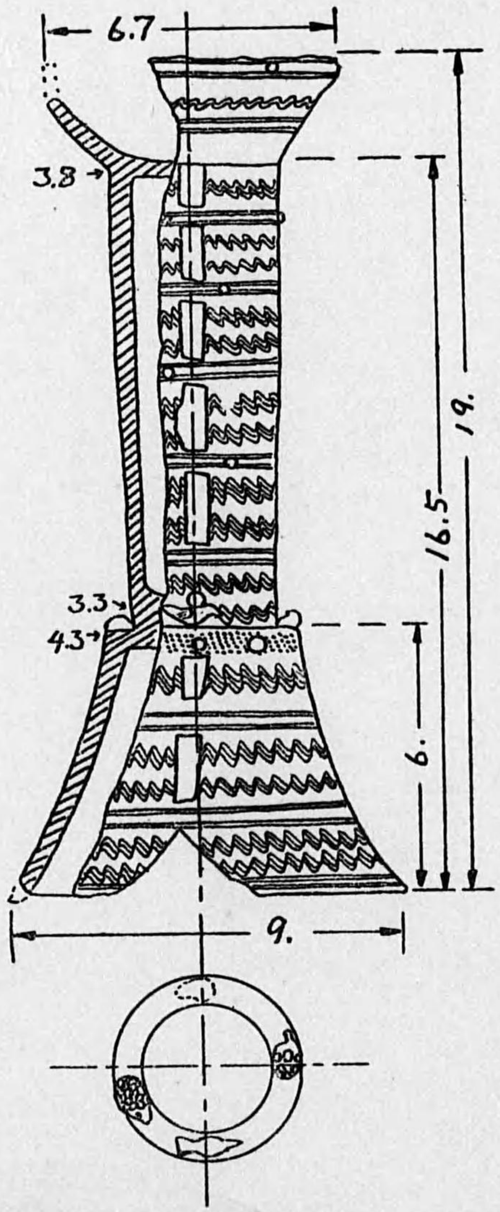

圖版第一一　前二子古墳實測圖

欠




圖版第一二　前二子古墳實測圖

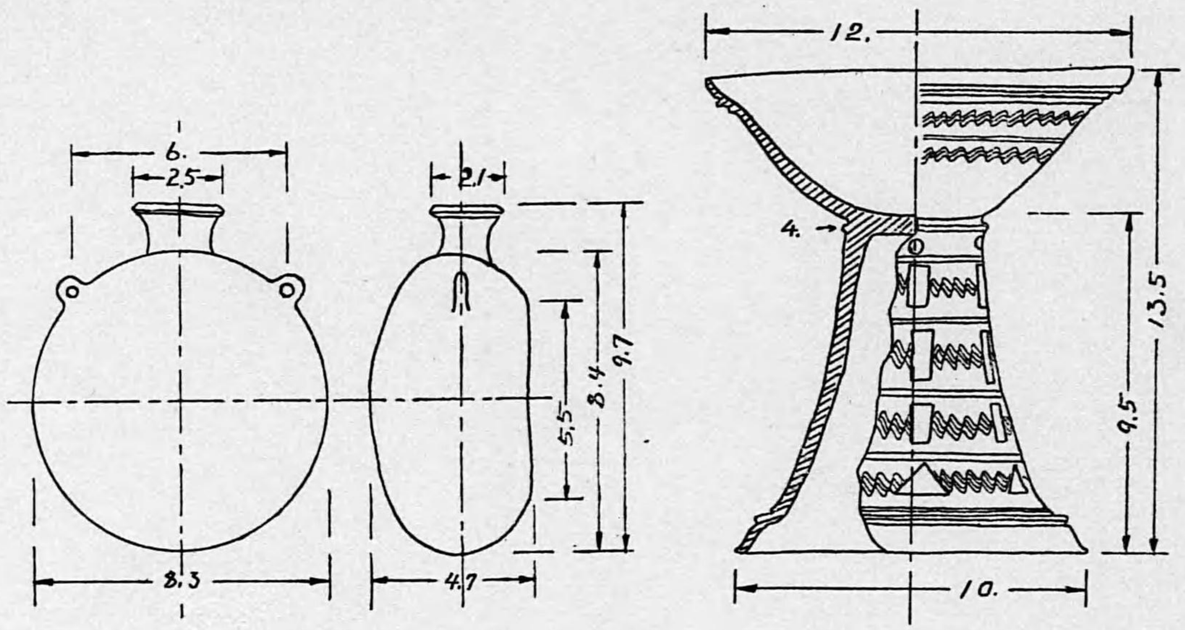
欠




圖測實金齋神四　　四一第版圖

欠

欠

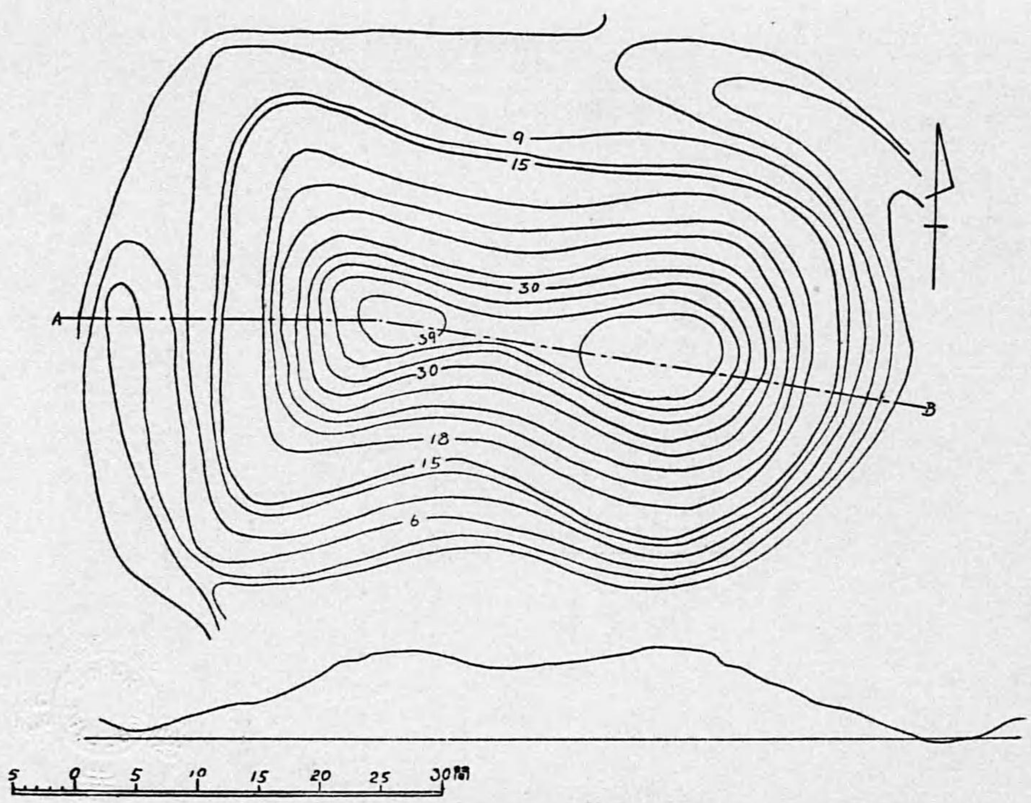



(瓶提付耳環)　　(盤付脚)

前二子古墳齋瓮實測圖　　六一第版圖

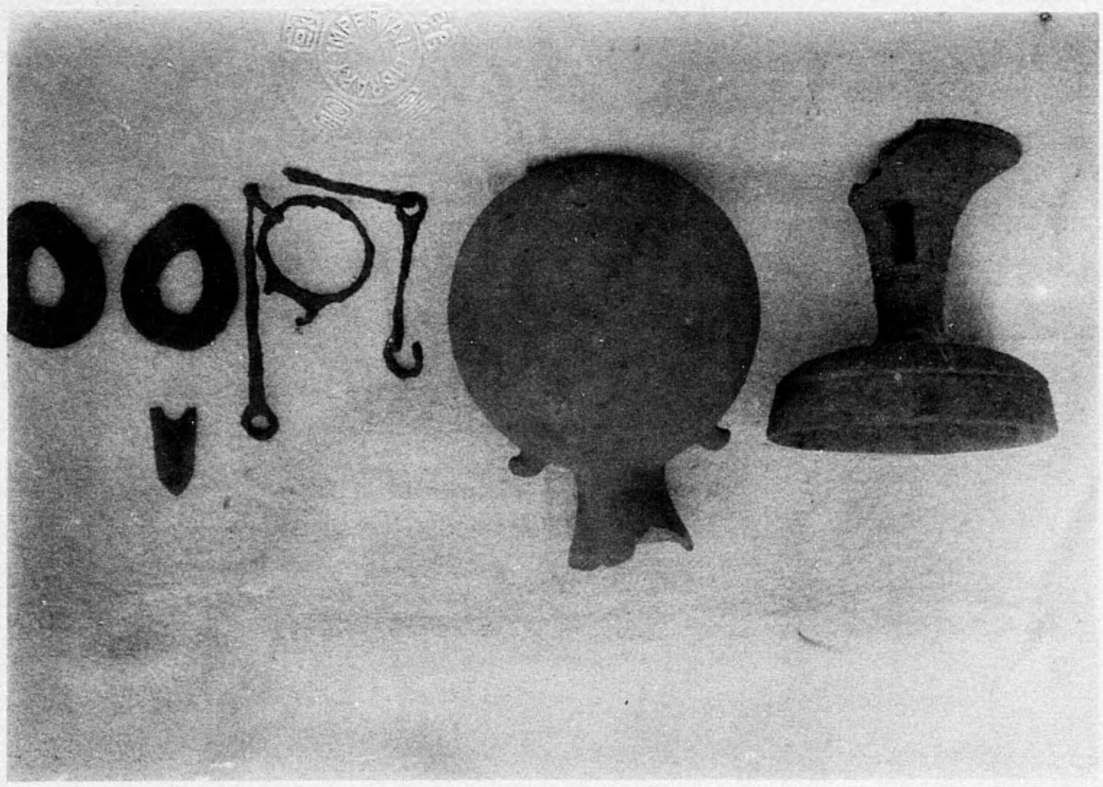
圖版第一七　中二子古墳（湟墨）

欠

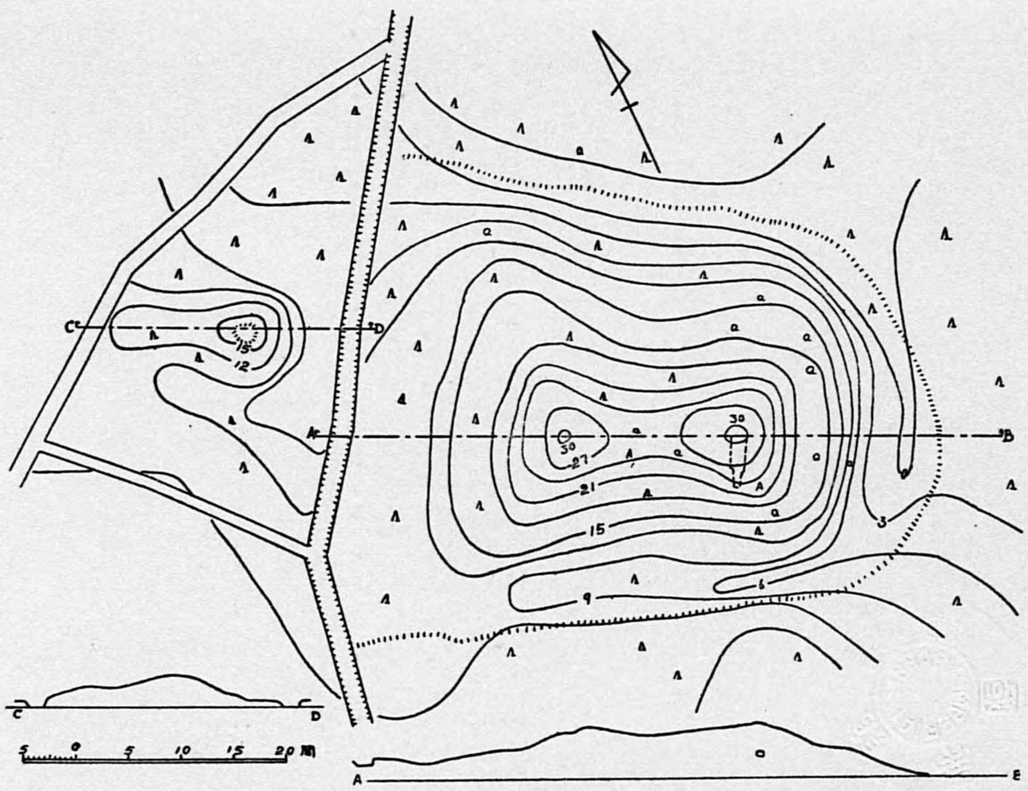



圖版第一九　中二子古墳實測圖

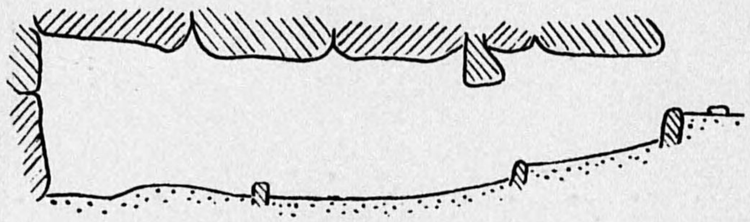
都圓後填古子二後　〇二弥成圖



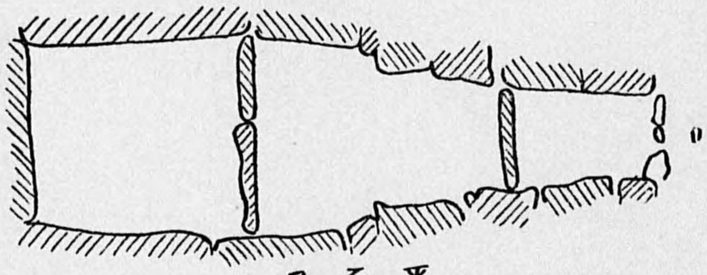
物遺墳古子二後　一二第版圖




圖版第二二　後二子古墳附小古墳實測圖

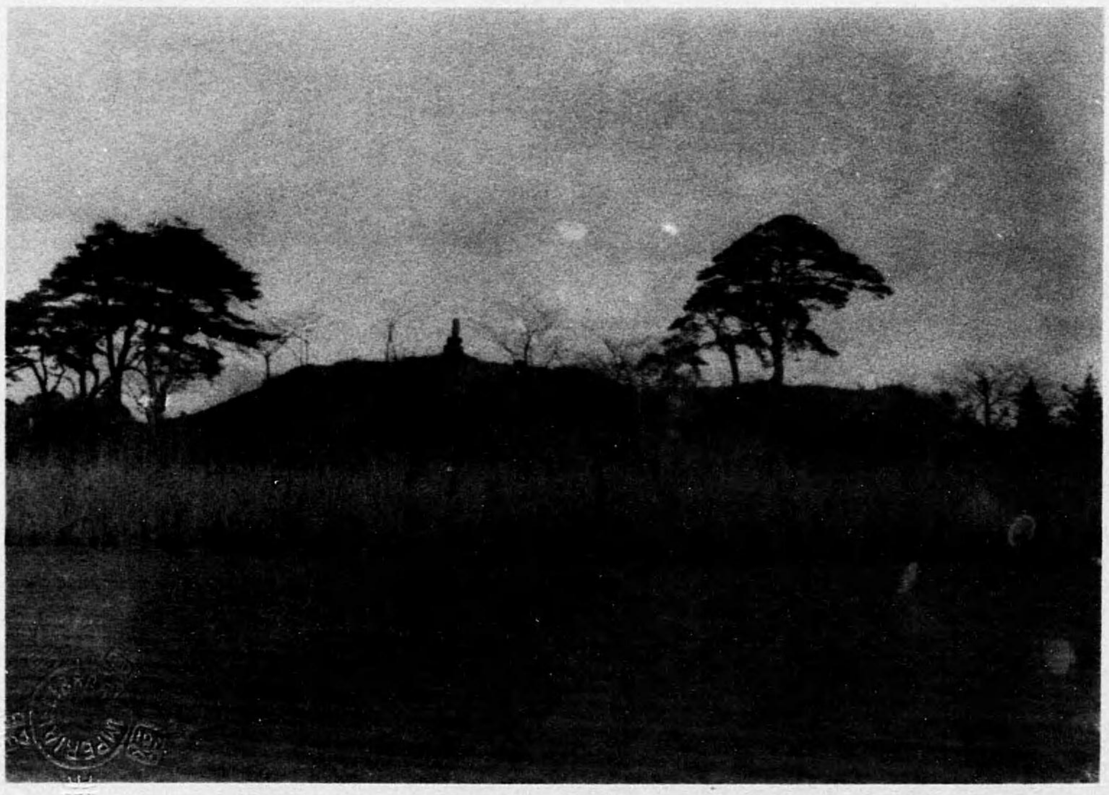


圖面斷



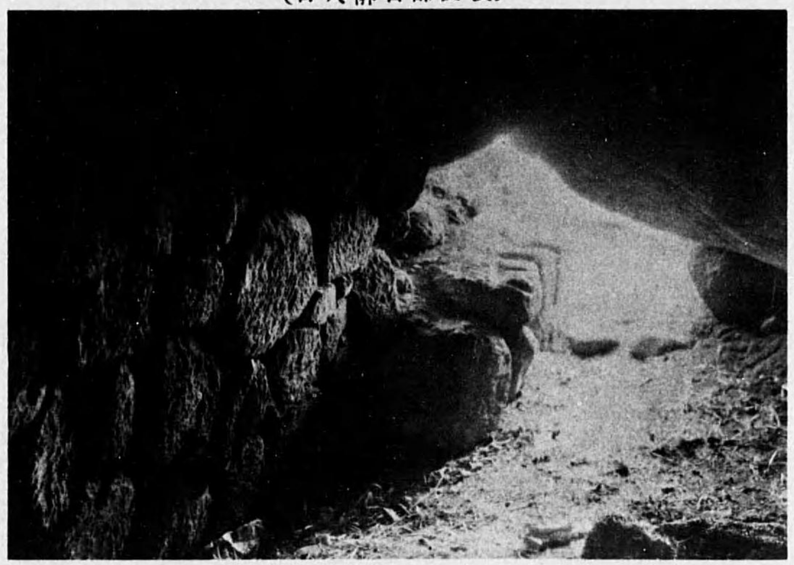
圖面平

(一分百) 圖測實槨石墳古子二後　　圖版第二三



圖版第二四　二子山古墳(總社町)全景

（後圓部石槨入口）



（同上羨道部）

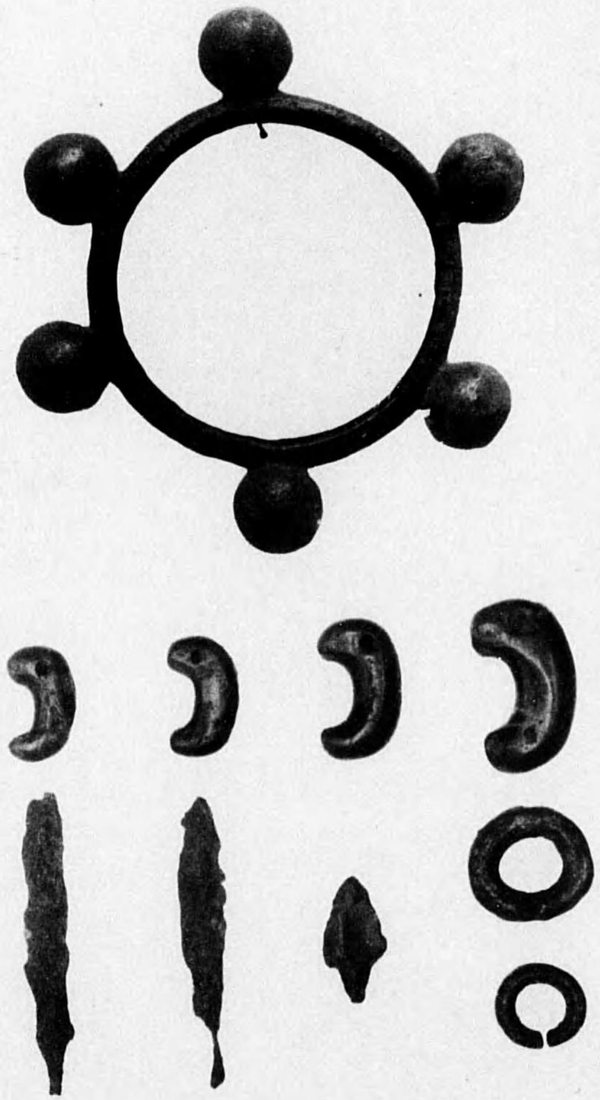
圖版第二五　二子山古墳（總社町）

（前方石槨入口）

（同上羨道部）

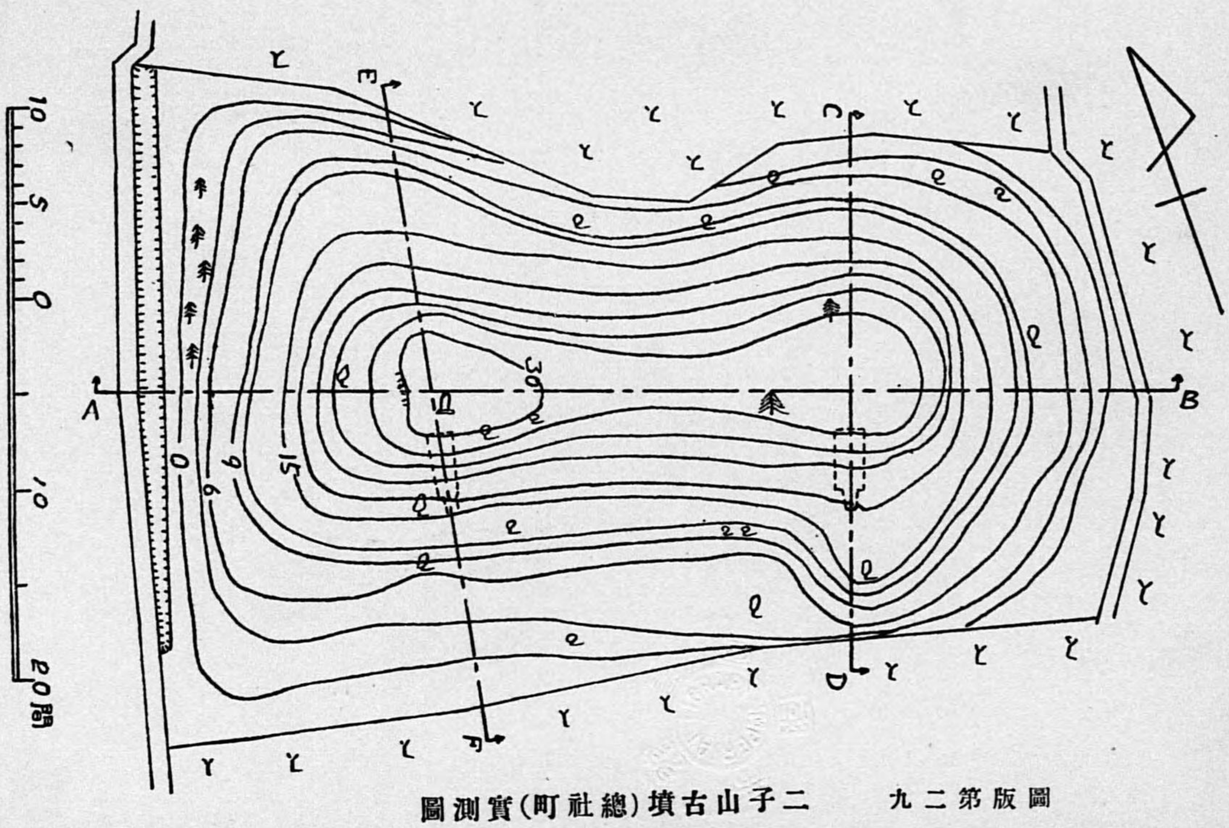
（町社總）墳古山子二　　圖版第二六

欠

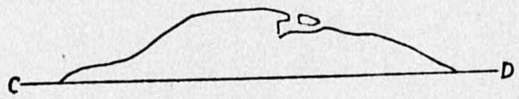


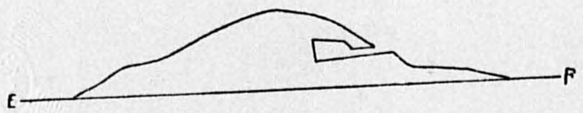
圖版第二八　二子山古墳（總社町）遺物

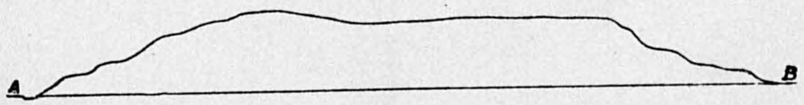
欠



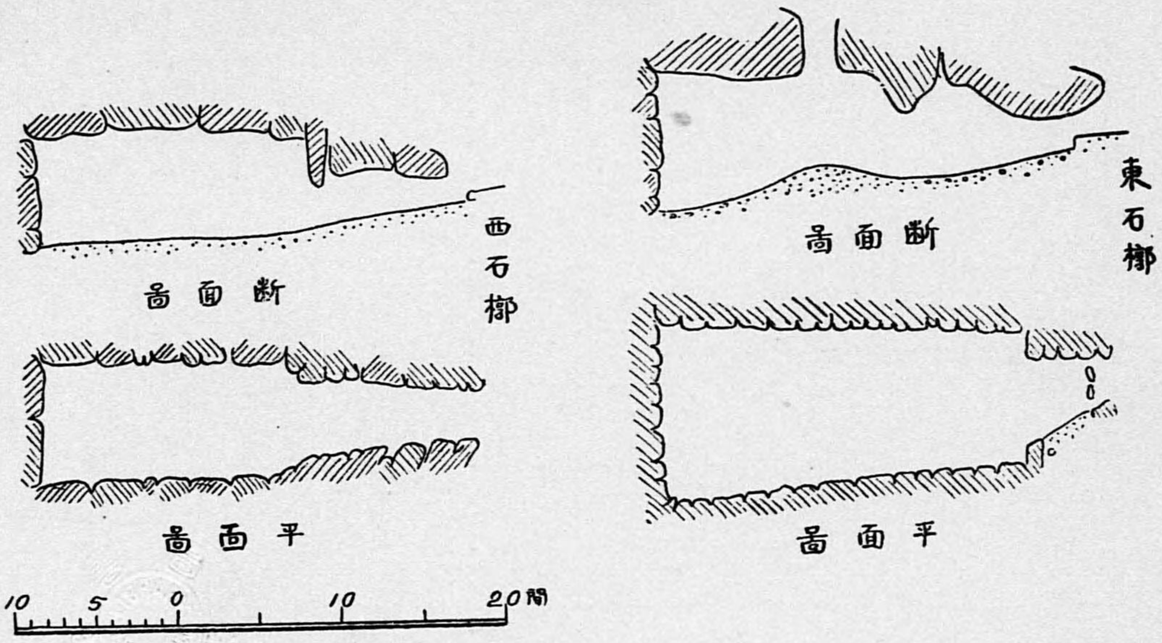

圖版第二九　二子山古墳(總社町)實測圖



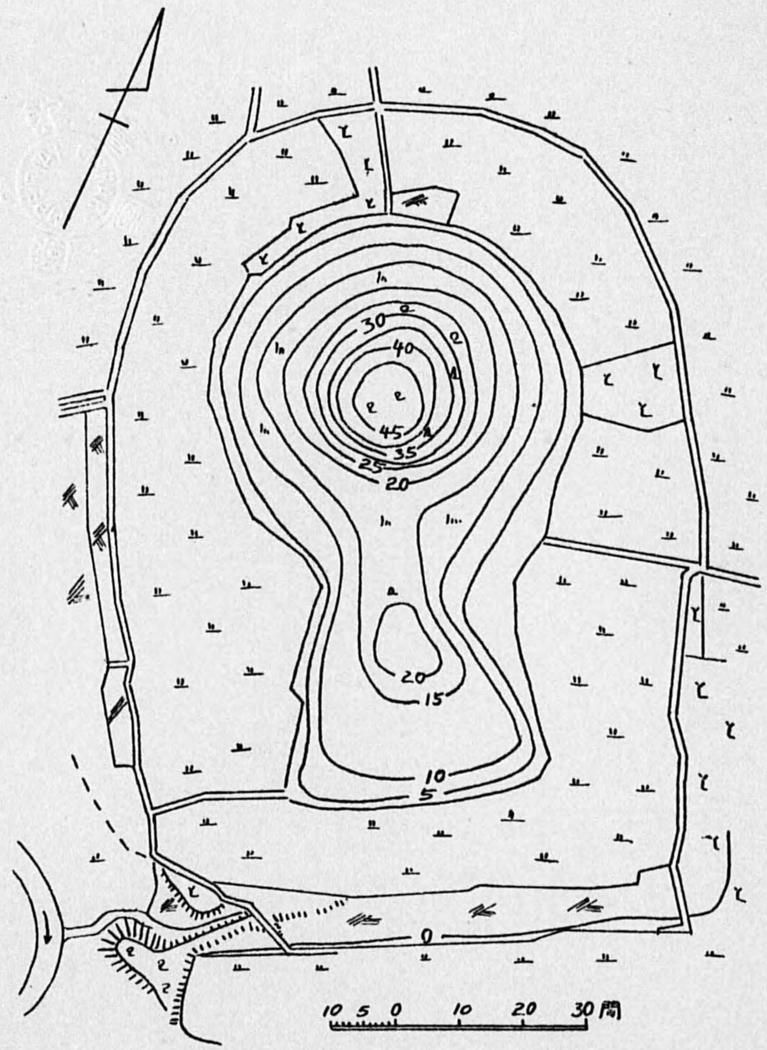



圖版第三〇　二子山古墳(總社町)斷面圖



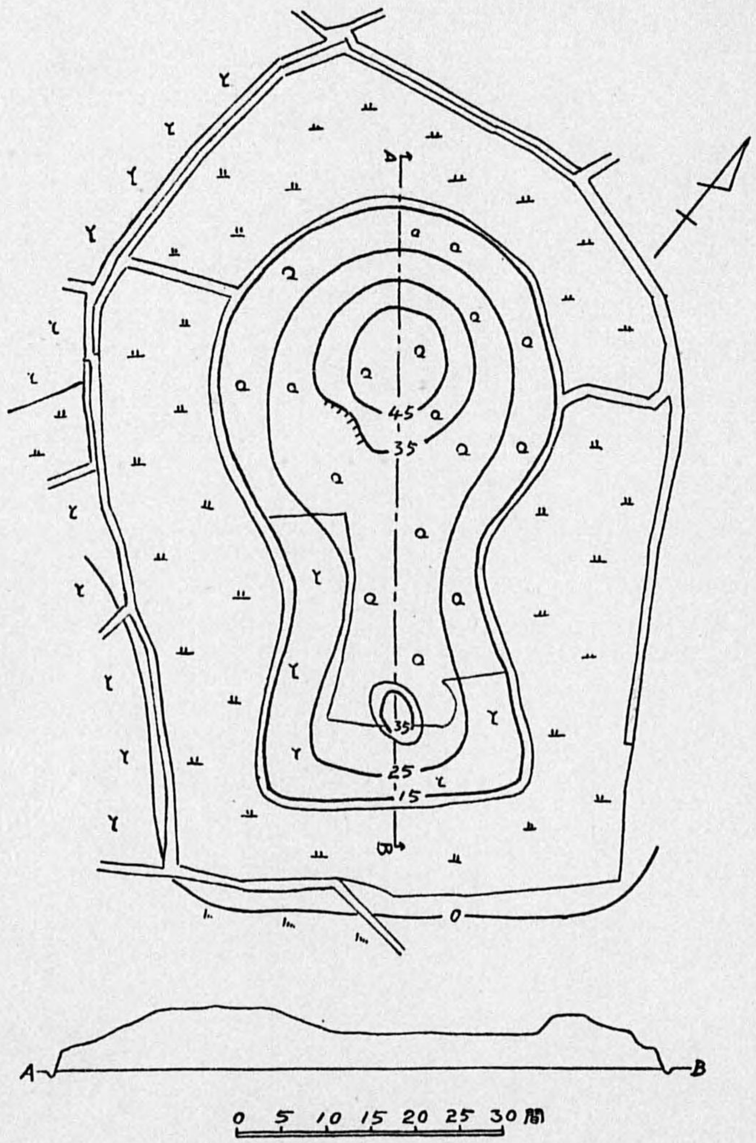

圖版第三一　二子山古墳（總社町）石槨實測圖

圖版第三二　淺間山古墳全景



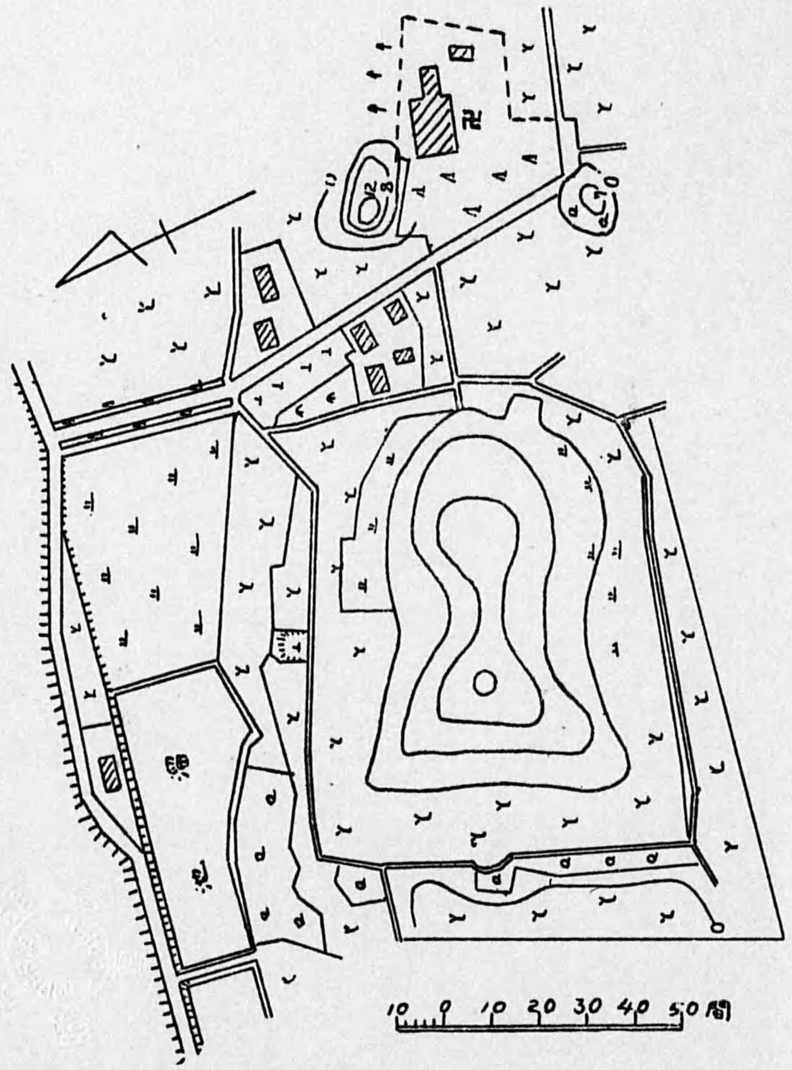

圖版第三三　淺間山古墳實測圖

圖版第三四　大鶴卷古墳全景



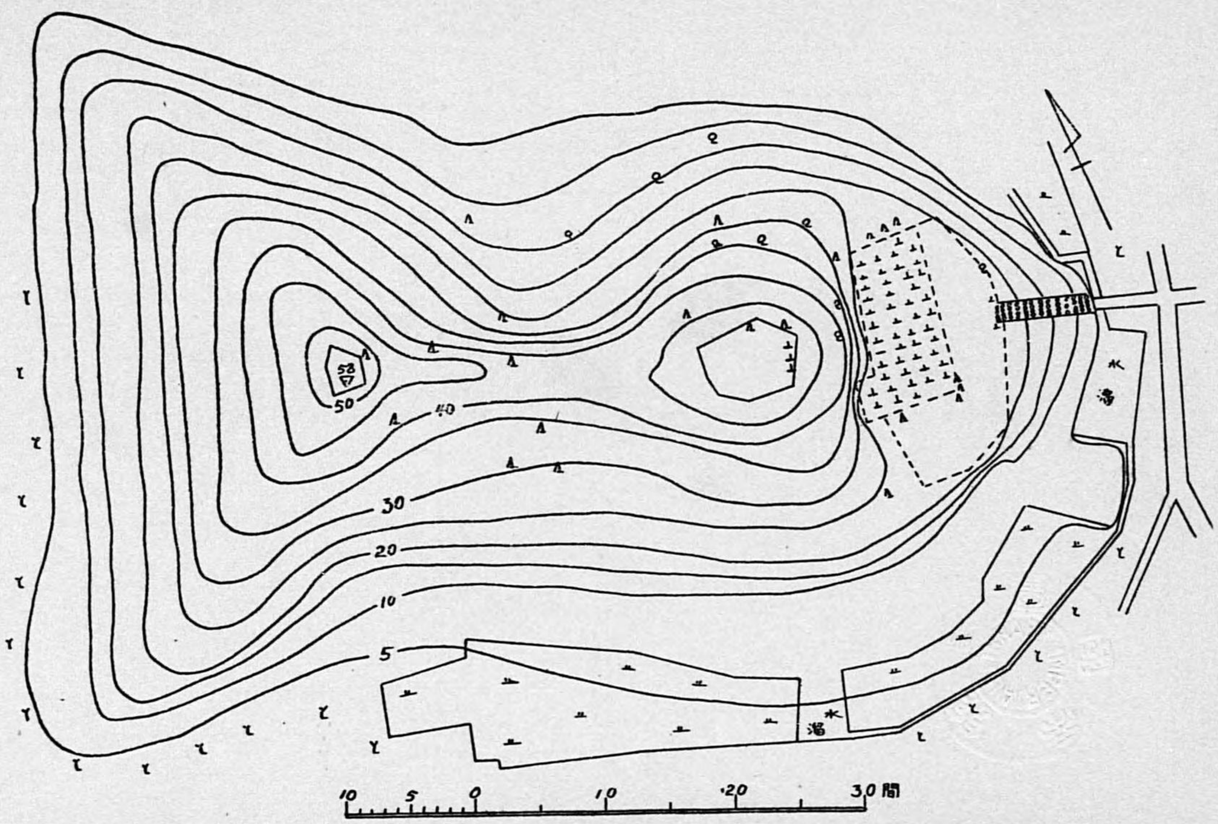

圖測實墳古卷鶴大　五三第版圖

欠



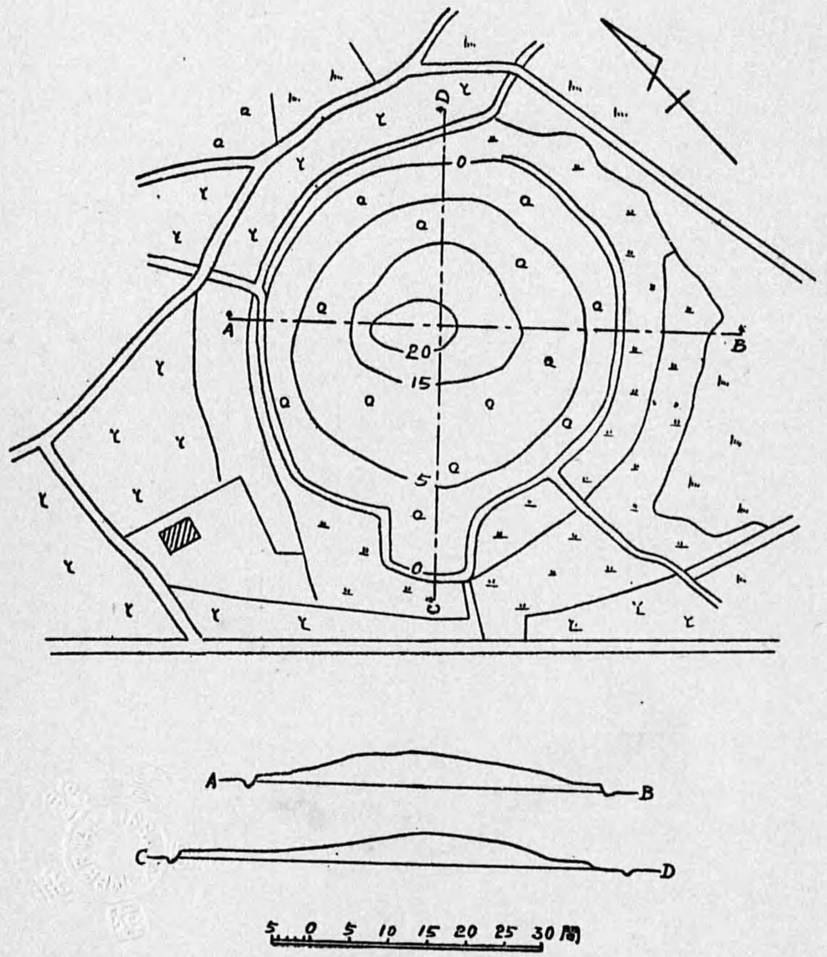

圖略墳古山興七　七三第版圖

欠




圖版第三八　七輿山古墳實測圖

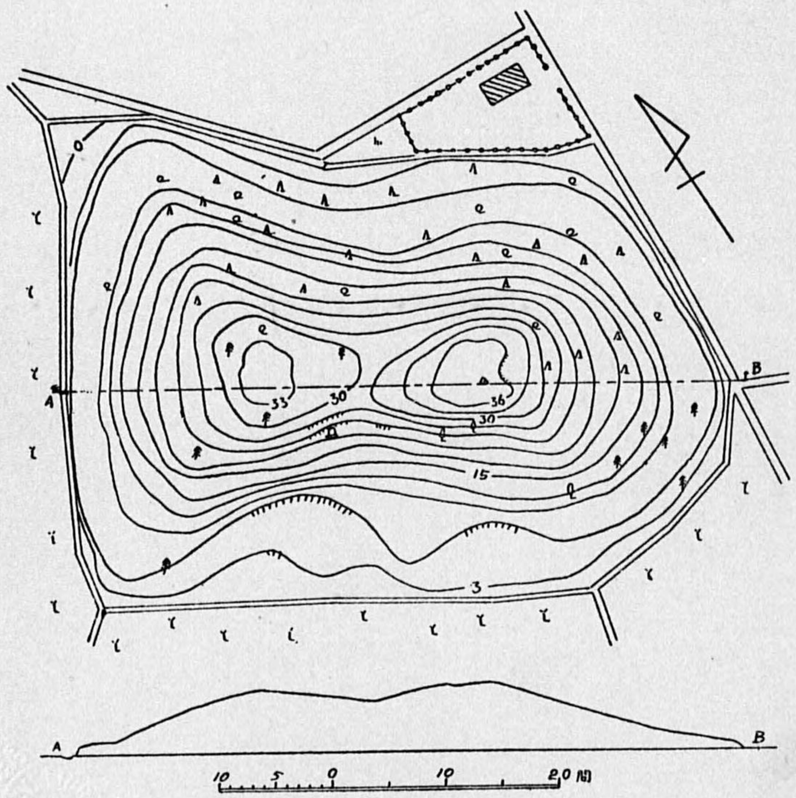
欠




圖版第四〇　女體山古墳實測圖

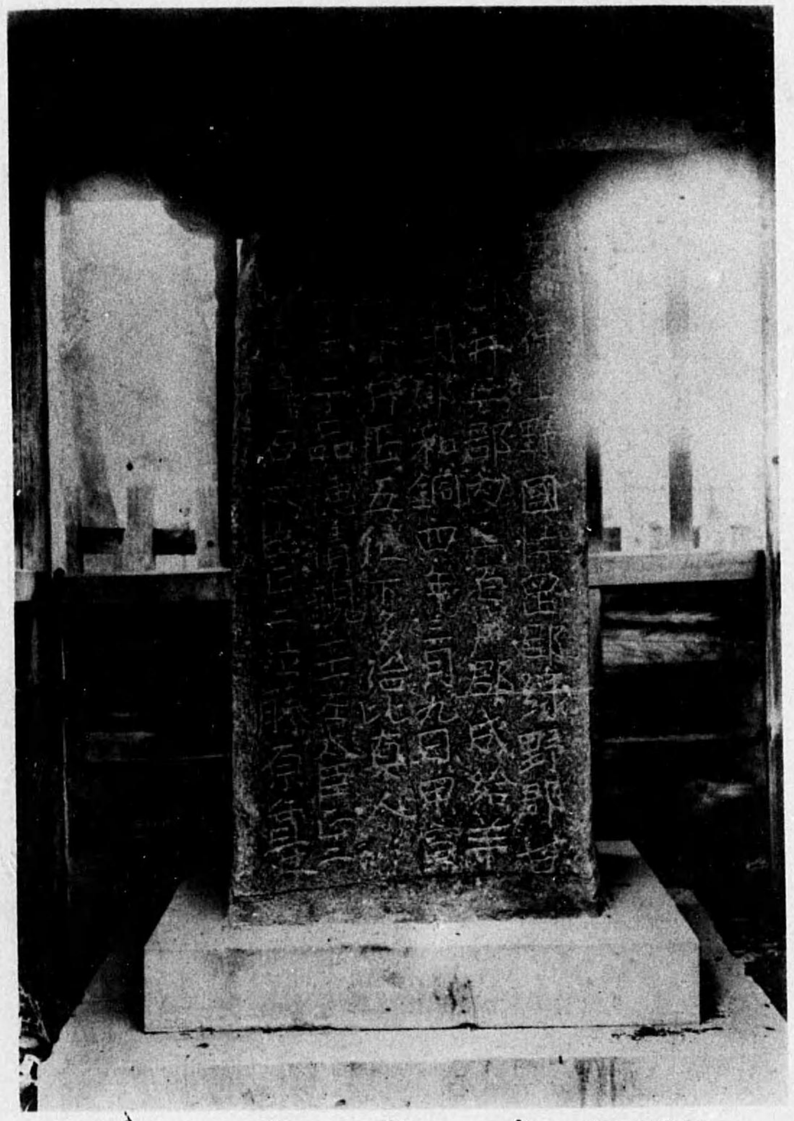
欠

圖版第四一　二子山古墳(前橋市)全景

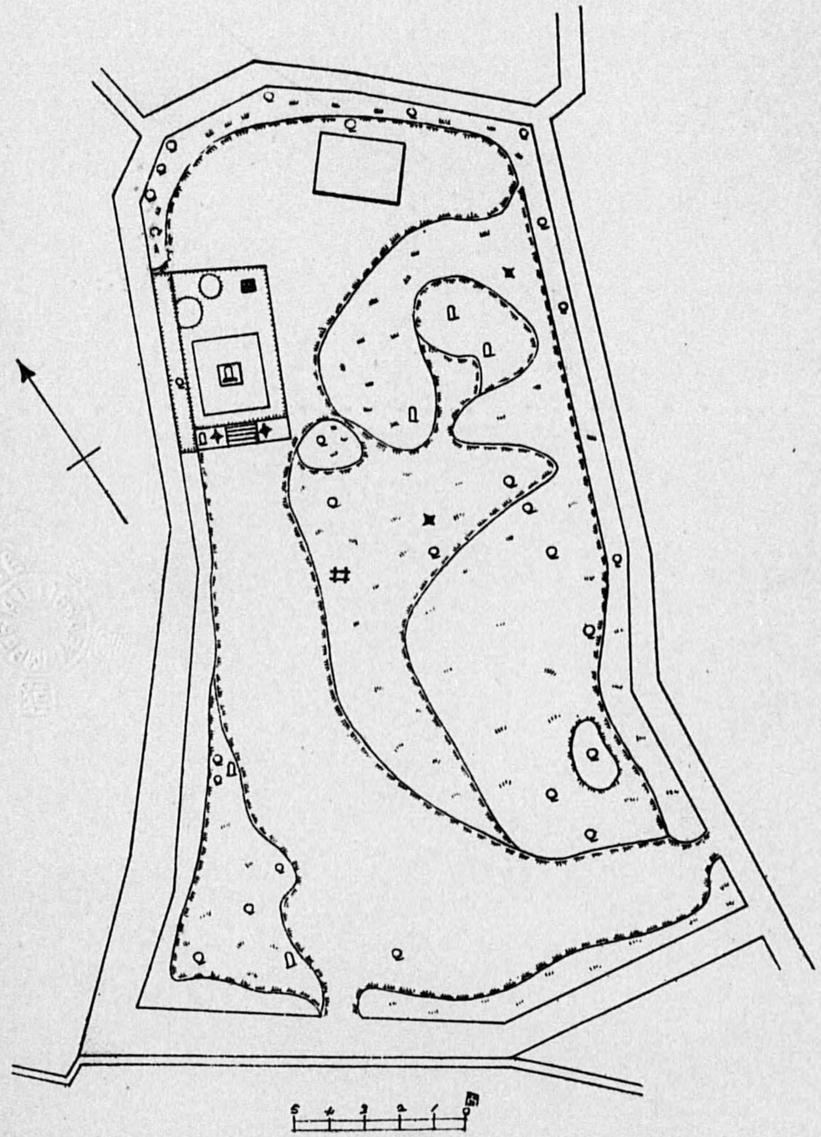



圖測實(市橋前)墳古山子二　　二四第版圖

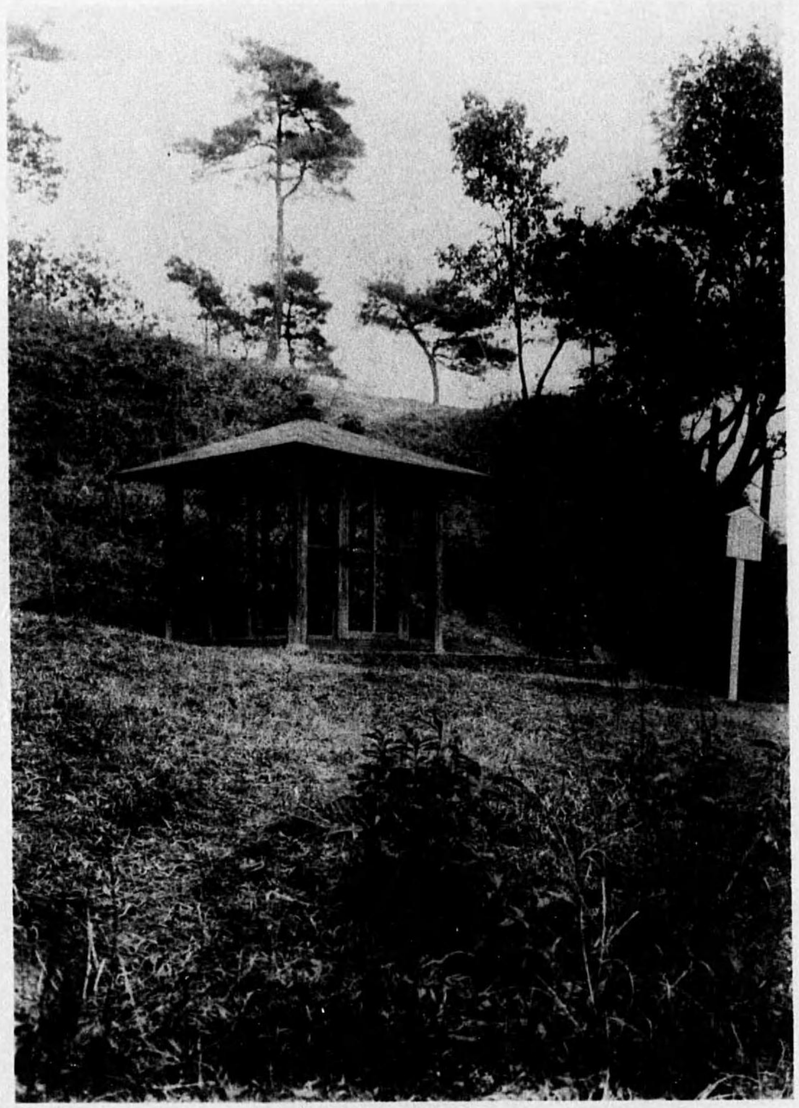
圖版第四三　多胡碑全景



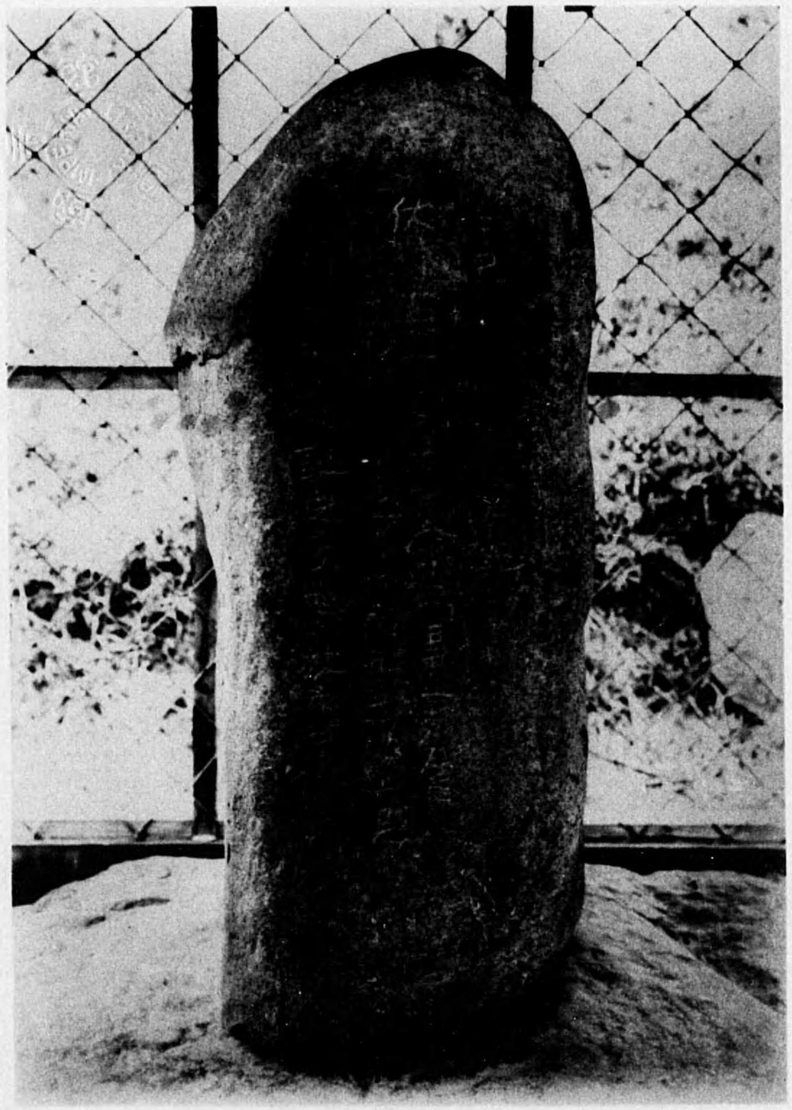
圖版第四四　多胡碑



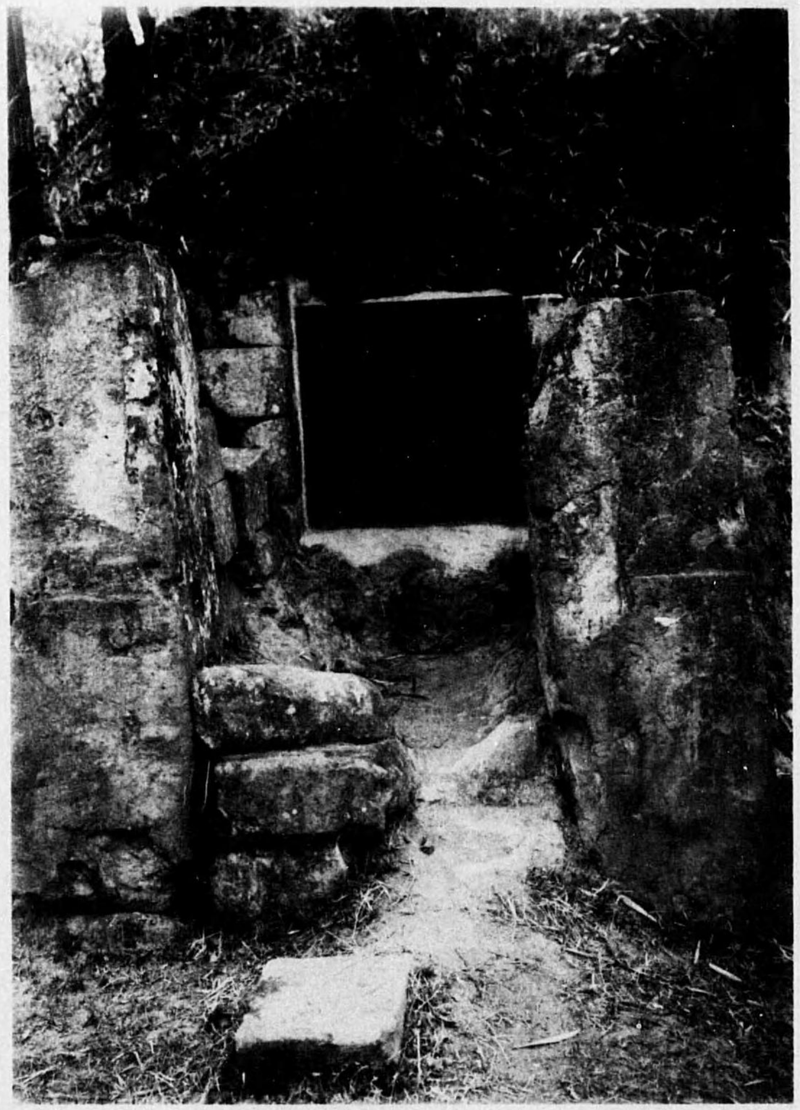
圖版第四五　多胡碑地域實測圖



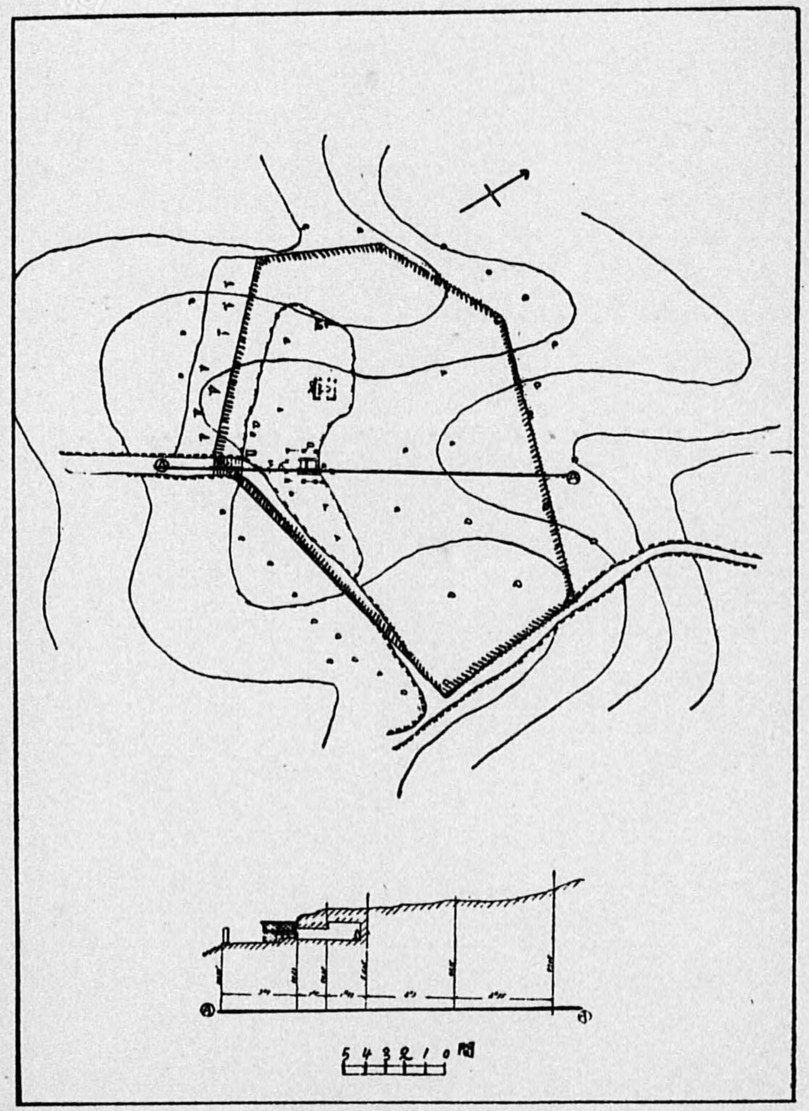
圖版第四六　山上碑並古墳



圖版第四七　山上碑

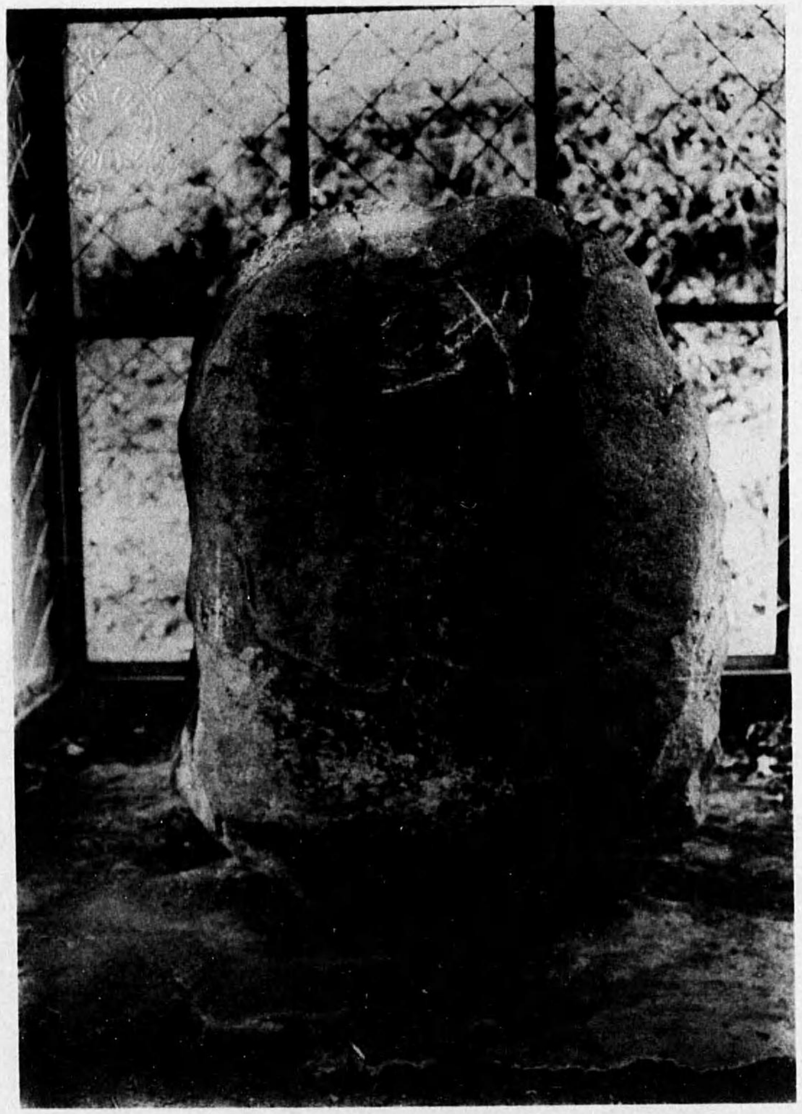


圖版第四八　山上古墳石槨入口

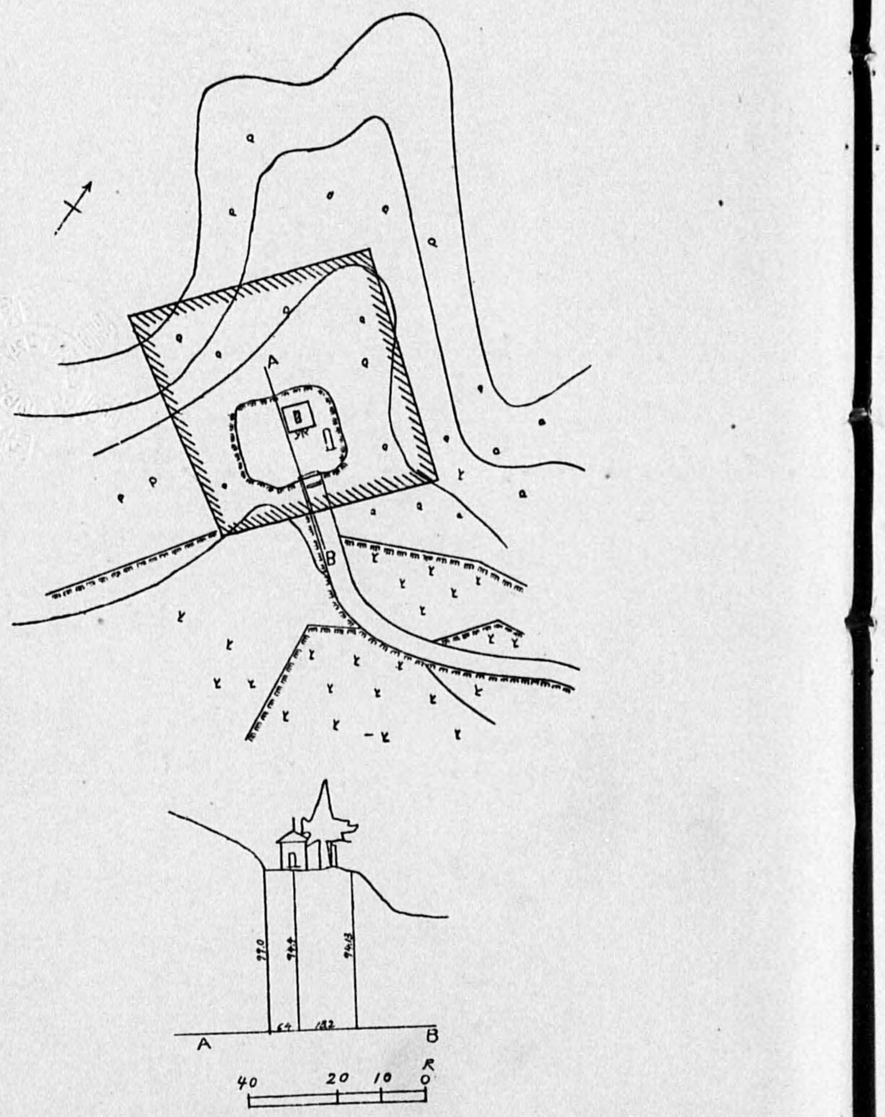


圖版第四九　山上碑及古墳地域實測圖

圖版第五〇　金井澤碑全景



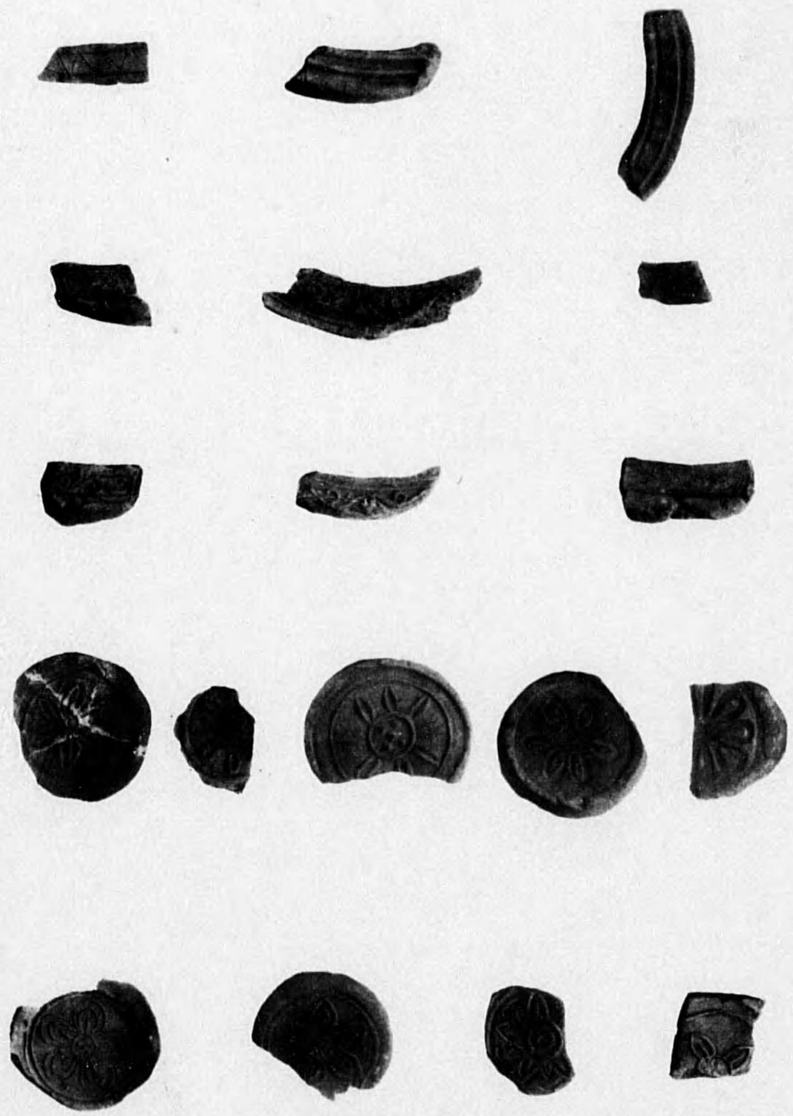
圖版第五一　金井澤碑




圖版第五二　金井澤碑地域實測圖

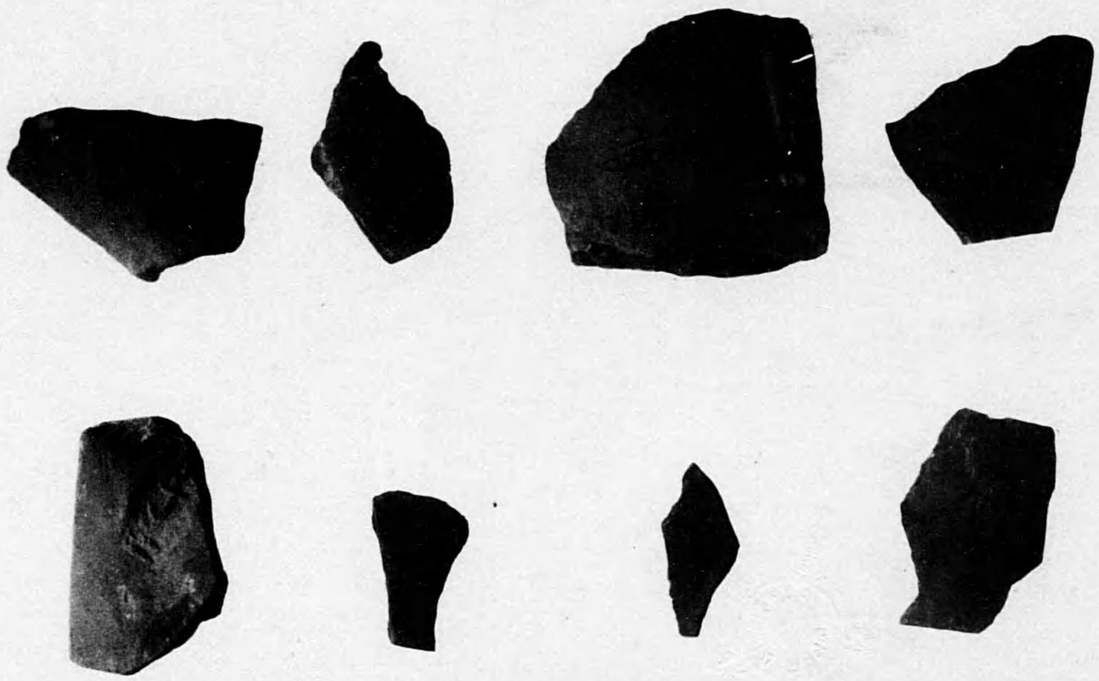
圖版第五三　上野國分寺趾全景

欠

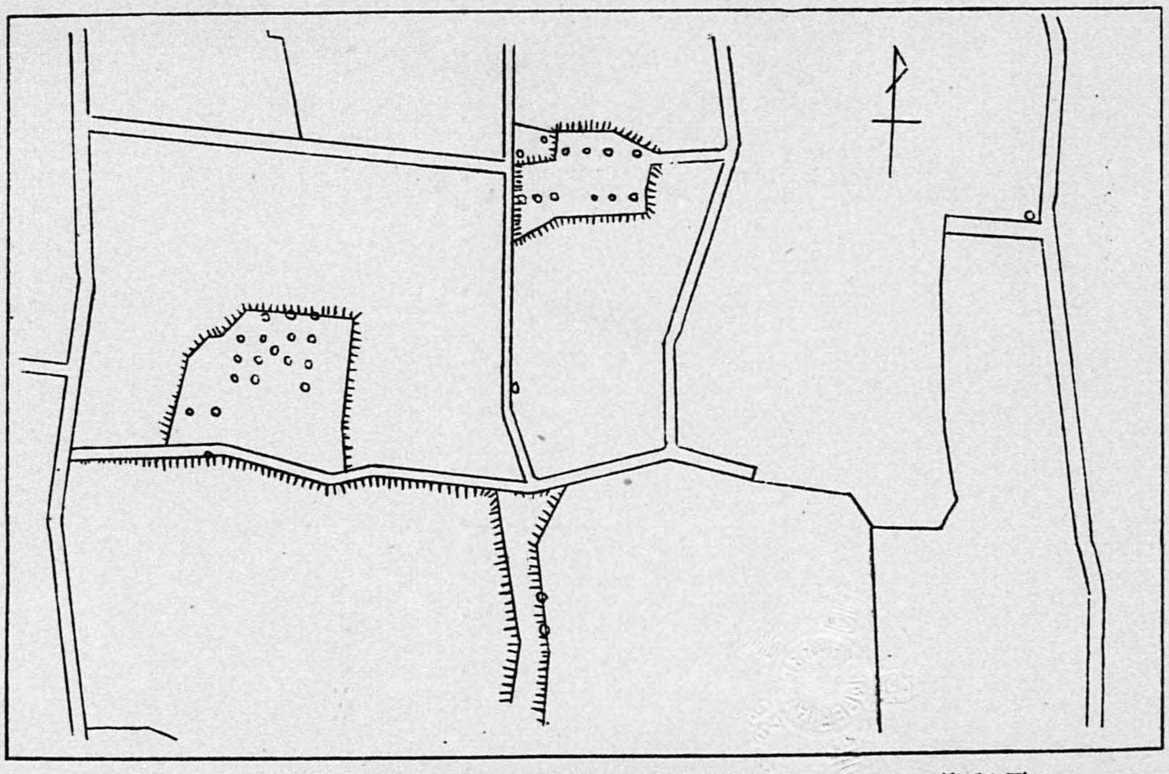


圖版第五六　上野國分寺阯遺瓦

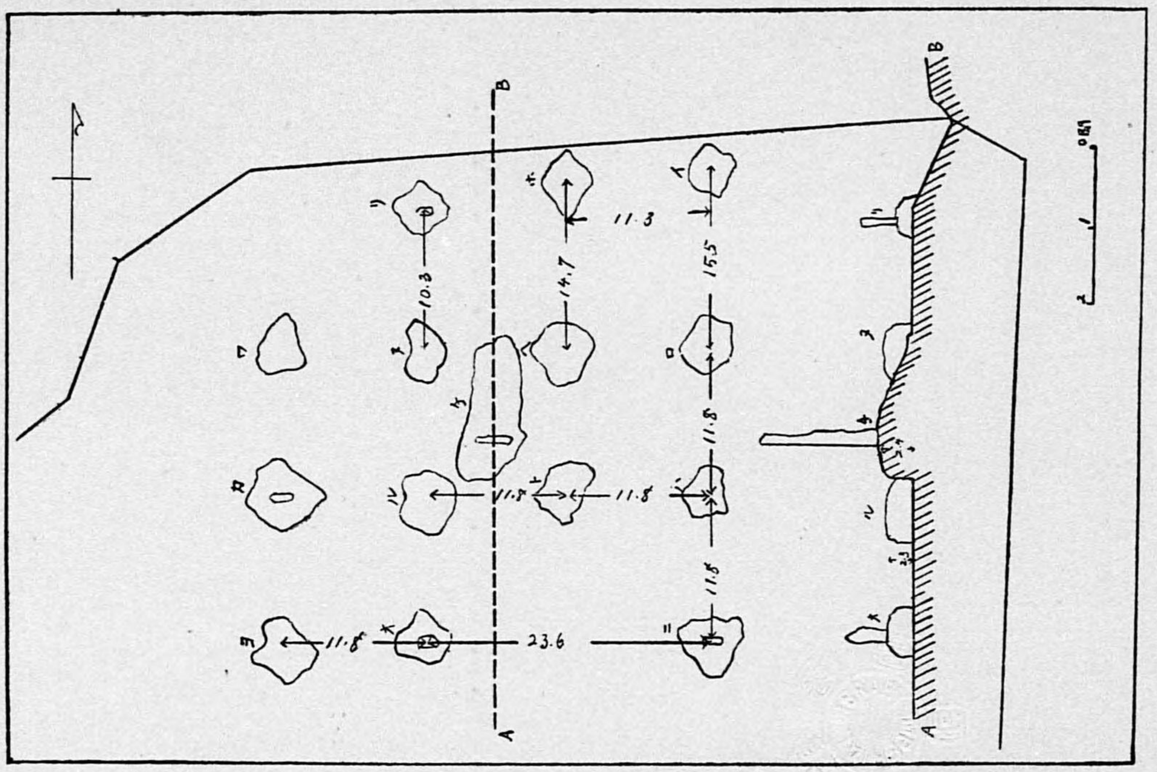
欠



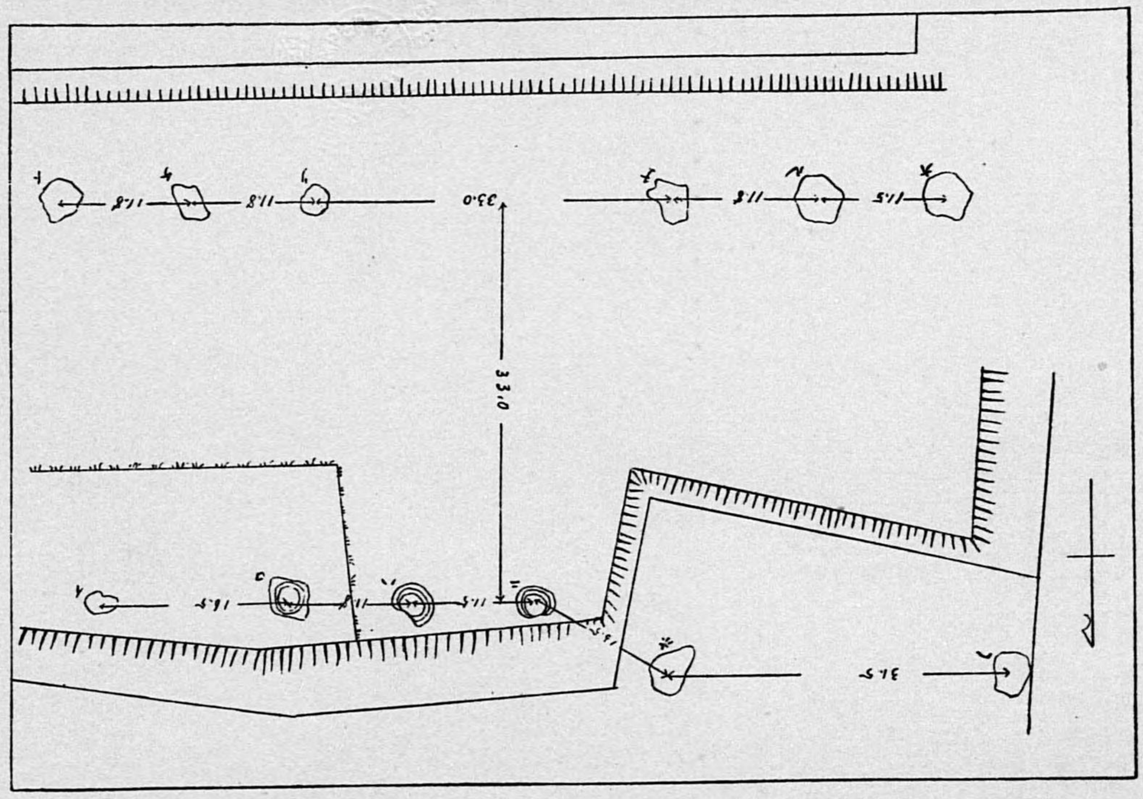
圖版第五七　上野國分寺址遺瓦



圖版第五八　上野國分寺址礎石配置圖

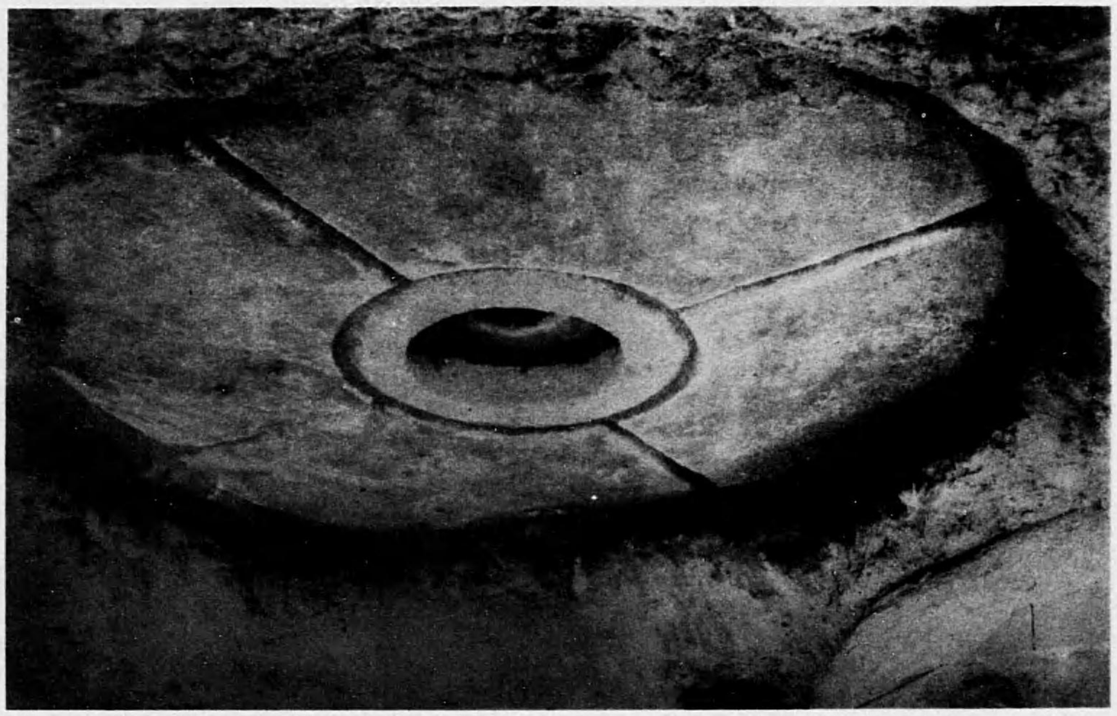



圖版第五九　上野國分寺塔阯實測圖




圖測實址堂金寺分國野上　〇六第版圖

欠

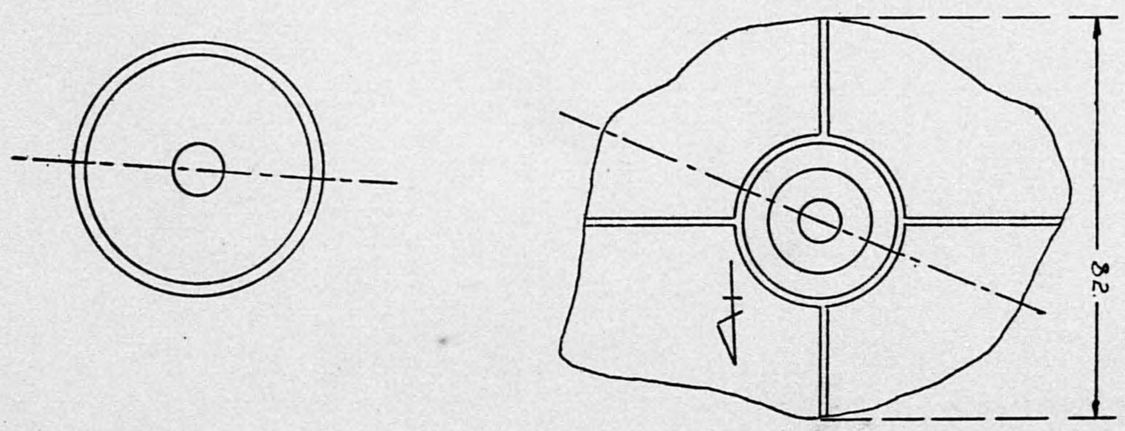


磯 心 庇 塔 王 山　　二六弥版圖

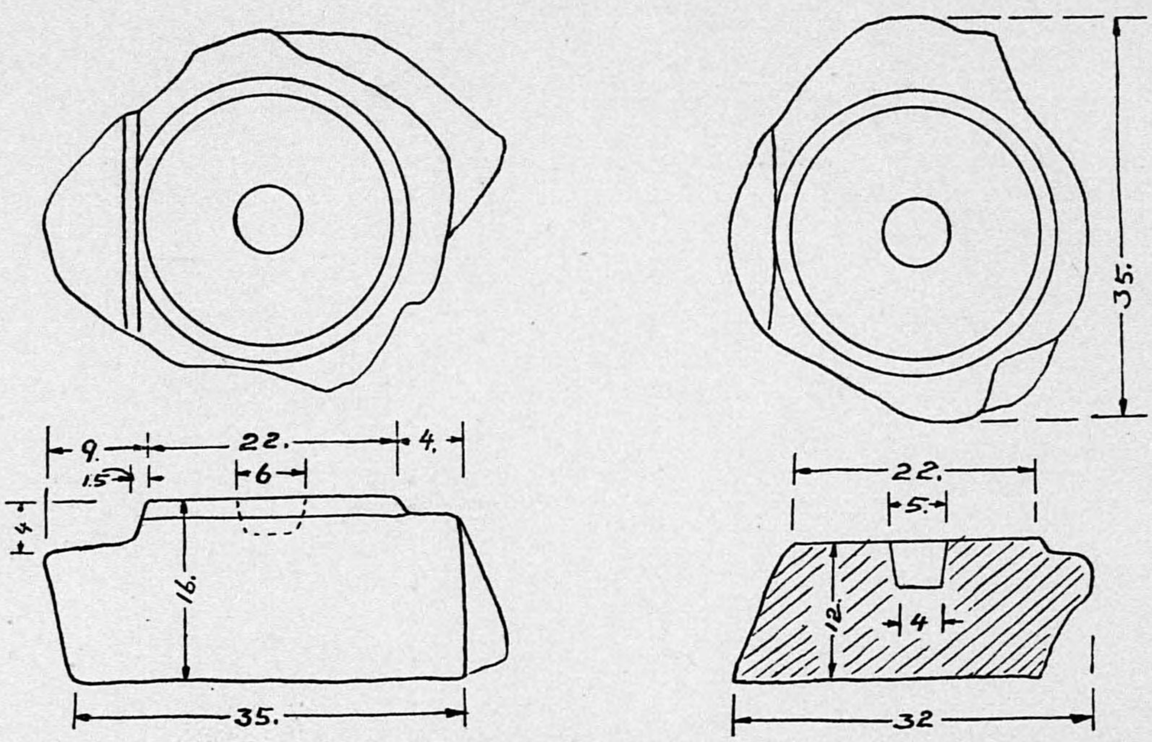
欠

圖版第六四　山王塔阯遺瓦

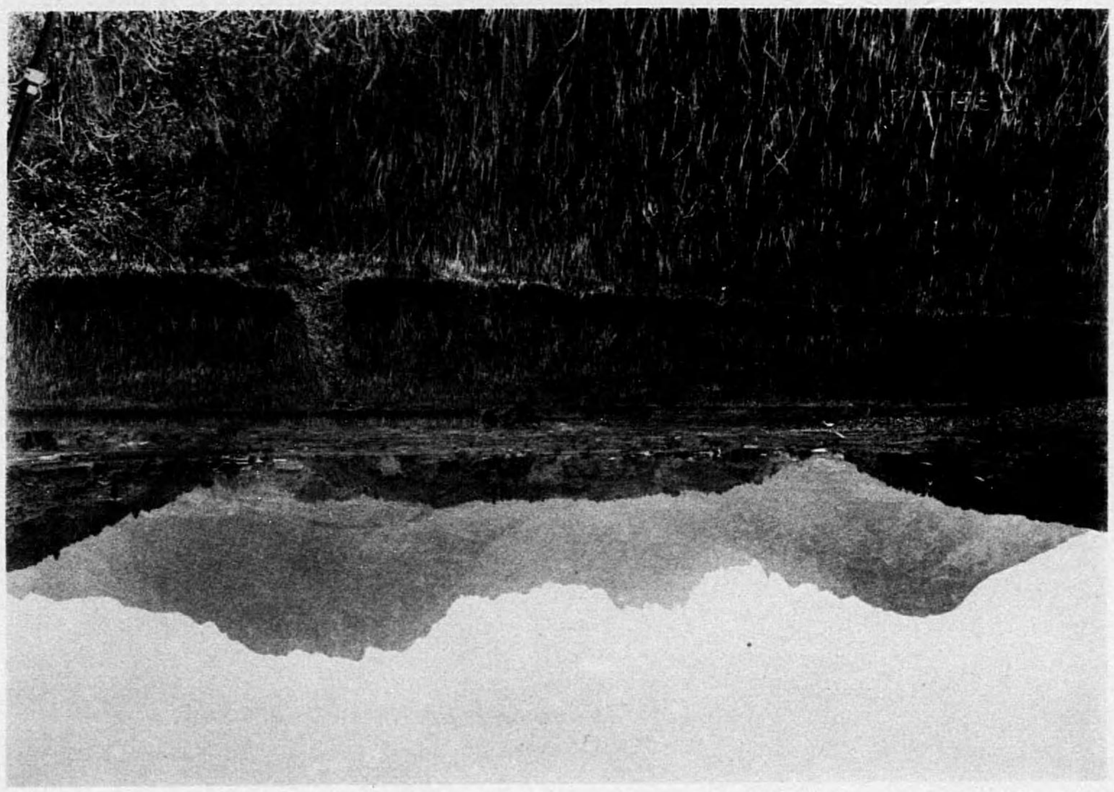
欠




圖測實礎心阯塔王山　五六第版圖




圖版第六六　山王塔阯礎石實測圖



景　全　山　義　妙　七六弟版圖

圖版第六八　第四石門附近より第二石門附近を望む（日暮し の絶景）

圖版第六九　第四石門より大砲岩等の奇岩を望む

圖版第七〇　妙義山御鏡岩附近の風景

昭和四年拾貳月拾日印刷
昭和四年拾貳月拾五日發行

定價金貳圓貳拾錢

著者　高橋城司

東京府戸塚町下戸塚十三番地
印刷人　上田榮吉

東京府戸塚町下戸塚十三番地
印刷所　三明社印刷部

發行所　三明社
東京府戸塚町下戸塚十三（早大舊正門前）
電話牛込一八五九、振替東京七七六一一

14.5
254

終